

発達段階を踏まえた外国語活動の指導方法に関する研究

— 小学校6年間の到達目標を明確にして —

【研究者】 企画部 指導主事 門倉 りえ

【研究指導者】 中国学園大学・中国短期大学 学長 松畑 熙一

研究の要約

本研究は、今後の外国語活動の在り方を見据え、低学年から理論に基づいた外国語活動を取り組んでいくことができるように、低学年・中学年・高学年の外国語活動の指導方法を明らかにしていくことを目的とした。実際に、広島県内においても、低学年から外国語活動に取り組む学校が増えているという現状も見られる。

このような現状の中で、平成25年12月13日に文部科学省から出された「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」には、小学校高学年の目標の案として「初歩的な英語の運用能力を養う」ことが示された。そこで「初歩的な英語の運用能力」を文献研究等から整理し、中学年及び低学年についても目指す姿（到達目標）を整理した。また、発達段階を踏まえた指導方法の工夫についても低学年・中学年・高学年のまとまりでまとめた。

成果としては、小学校卒業時の目指す姿である到達目標や発達段階に応じた指導方法について様々な文献等から整理することができた。一方、課題としては、今回作成した表を基に、実際に授業等で実践することを通して、効果を検証する必要がある。

キーワード：発達段階を踏まえた外国語活動 到達目標 文字指導

目次

I 研究の目的と方法	89
II 研究の基本的な考え方	90
III 小学校6年間の到達目標について	94
IV 6年間の発達段階をどう踏まえるのか	102
V 指導方法の工夫について	105
VI 研究の成果と課題	108
おわりに	108
資料	111

I 研究の目的と方法

1 研究の目的

本研究は、今後の外国語活動の在り方を見据え、低学年からも理論に基づいた外国語活動を取り組んでいくことができるように、低学年・中学年・高学年の外国語活動の指導方法を明らかにしていくことを目的とする。平成25年12月13日に文部科学省から出された「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（以下、「英語教育改革実施計画」とする。）によると、初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校におけ

る英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図ることが示された。2020年（平成32年）の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、新たな英語教育が本格展開できるように、体制整備等を含め来年度から逐次改革を推進することになっている。実際に、広島県内においても、低学年から外国語活動に取り組んでいる学校があり、新たな英語教育への動きが生じている。

このような中、低学年・中学年における外国語活動の在り方について整理することが求められると考える。また、理論に基づいた大きな枠組みを設定し、よりよいものを構築していくことが早急に求められると考える。

2 研究の内容と方法

- 県内の外国語活動に取り組む状況を把握する
- 発達段階を踏まえた英語教育に関する文献研究
- 低学年・中学年・高学年の外国語活動の指導方法に関する文献研究
- 低学年・中学年・高学年の外国語活動の到達目標等の設定と指導方法について（提言）

3 研究計画

本研究の計画及び経過について、表1に示す。

表1 研究の計画及び経過

研究内容	期間
○ 研究計画書の作成	4月
○ 理論研究	5月～11月
○ 到達目標及び発達段階を踏まえた指導方法等の作成	11月～1月
○ 単元計画例作成	12月～3月
○ 報告書の作成	1月～3月

II 研究の基本的な考え方

1 外国語活動の導入について

今回の学習指導要領の改訂に伴い、総合的な学習の時間において国際理解に関する学習の一環として取り組まれてきた外国語会話等（いわゆる、英語活動）については、外国語活動の時間が新しく設定された。広島県においても、平成21年度から先行実施をし、文部科学省から配付された「英語ノート」を中心に取組を開始した。外国語活動導入の経緯については、表2に詳しく示す。

表2 外国語活動導入の経緯⁽¹⁾

年	内容
昭和61年	・臨時教育審議会「教育改革に関する第二次答申」（中高における英語教育の目的の明確化・教育内容等の見直しとともに、英語教育の開始時期についても検討を進めることを提言）
平成4年	・研究開発学校の指定（国際理解教育としての英語教育の実験的導入）
平成8年	・中央教育審議会第一次答申（総合的な学習の時間の活用等により外国語に触れる機会をもたせることが適当）
平成10年	・学習指導要領の改訂（「総合的な学習の時間」の設定により、全国の小学校で、いわゆる英語活動が広く行われることとなった）
平成14年	・『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想 ※小学校英語活動実施状況調査 英語活動の実施率 平成15年度 約88%→平成19年度 約97%
平成15年	・文部科学大臣より「今後の初等中等教育改革の推進方策について」包括的な諮問

平成18年	・中央教育審議会外国語専門部会報告（小学校において英語教育の共通の教育内容を設定することを提言） ※英語活動の実施時間数が平均13.7単位時間（第6学年の場合）
平成20年	・中央教育審議会答申（外国語活動の新設を答申）小学校学習指導要領改訂（小学校第5学年及び第6学年に外国語活動を位置付け）
平成23年	・小学校学習指導要領 全面实施

改訂の指針としては、次の2点が挙げられる。

- 社会や経済のグローバル化が急速に進展し、異なる文化の共存や持続可能な発展に向けて国際協力が求められるとともに、人材育成面での国際競争も加速していることから、学校教育において外国語教育を充実することが重要な課題の一つとなっている。
- 小学校段階における英語活動については、現在でも多くの小学校で総合的な学習の時間等において取り組まれているが、各学校における取組には相当のばらつきがある。このため、外国語活動を義務教育として小学校で行う場合には、教育の機会均等の確保や中学校との円滑な接続等の観点から、国として各学校において共通に指導する内容を示すことが必要である。

また、卯城祐司(2009)は、外国語活動の導入について、「日本を取り巻く状況を見ると、1996年にタイで、1997年には韓国で、そして2005年には中国で、さらに2007年からは英語に対してある種の感情をもつとさえ言われていたフランスにおいても小学校段階での英語が必修化となっており、急速なグローバル化とともに、国内外において異なる文化と共存したり、国の垣根を越えて協力したりしていく機会が増え、外国語教育の充実が求められている中で、この外国語活動の新設となった。」¹⁾と述べている。

これらのことから、昭和60年代から20年以上にわたって審議されてきた英語教育の開始時期について小学校段階から取り組まれることとなった。

2 外国語活動の目標とは

(1) 外国語活動の目標について

小学校学習指導要領(2008)によると、外国語活動の目標は「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」²⁾ことである。この目標は、

「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める」こと、「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」こと、そして「外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」ことの三つの柱から成り立っている。これらは、一つ一つ独立した目標に対して別個の内容の活動を設けて達成するのではなく、音声を中心に外国語に慣れ親しませる活動を通じて、その中で自分たちや外国の言語や文化について様々な点に気付き、体験的に理解を深めるとともに、コミュニケーションの重要性や楽しさを経験して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することになる。そして、これら三つの柱は、三位一体の活動の中で統合的に体験することになる。

卯城（2009）は、「これら三つの目標のいずれであっても、外国語活動は『外国語を通じて』行うことにより実現を図ることになる。そして、これら三つの目標が達成された時、それが中・高の英語（外国語科）の学習につながる『コミュニケーション能力の素地』となることが期待され、中学校との連携が図られる。また、外国語活動の目標は、弾力的な指導が可能となるように、学年ごとには示さずに、2年間を通した目標になっている。」³⁾と述べている。

次に、現行の学習指導要領における小学校外国語活動と中学校外国語科及び高等学校外国語科の目標の系統性について図1に示す。

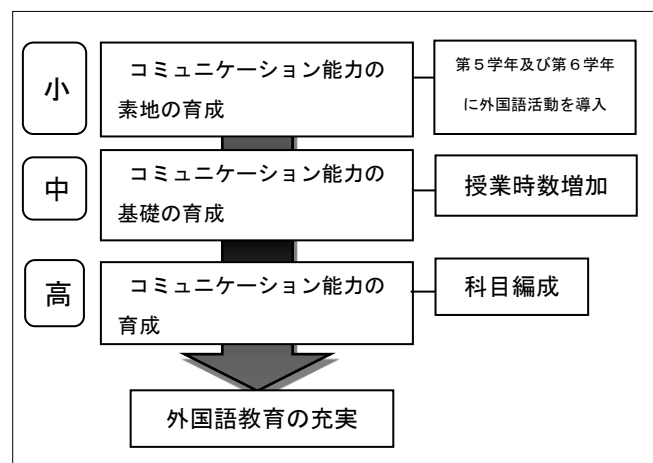


図1 学習指導要領改訂の基本的な考え方

図1から、小学校から高等学校までの外国語教育を貫くものは、「コミュニケーション能力」であり、小学校から高等学校を通じて外国語教育の充実を図っていくことが分かる。

また、小学校外国語活動と中学校外国語科の対照表を、表3に示す。

小学校外国語活動の目標の中で注目すべき文言は「体験的に」である。また「体験的に『聞くこと』

表3 小学校外国語活動と中学校外国語科の対照表

	小学校外国語活動	中学校外国語科
扱い	領域	教科
時間数	週1 35時間	週4 140時間
目標	外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う
評価	・コミュニケーションへの関心・意欲・態度 ・外国語への慣れ親しみ ・言語や文化に関する気付き	・コミュニケーションへの関心・意欲・態度 ・外国語表現の能力 ・外国語理解の能力 ・言語や文化についての知識・理解
内容・技能	外国語を聞いたり、話したりすること	「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能
文字の取扱	アルファベットの活字体の大文字及び小文字に触れる段階にとどめる	アルファベットの活字体を使用できるようにする
語彙	児童の実態を踏まえて複雑にならないようにする「Hi, friends!」においては約300語	1200語程度
文法事項	中学校段階の文法等を単に前倒しにするのではなく、あくまでも、体験的に「聞くこと」「話すこと」を通して、音声や表現に慣れ親しむ	コミュニケーションを支えるものと捉え、コミュニケーションを実際に行う言語活動と効果的に関連付けて指導すること

『話すこと』を通してとされており、音声を中心として取り組むことも特徴と言える。

(2) 外国語教育における小学校・中学校・高等学校で目指すコミュニケーション能力とは

現行の学習指導要領においては、小・中・高の目標において、コミュニケーション能力という言葉が共通している。そもそもこのコミュニケーション能力とはどのような力であるのかについて整理をしたい。

Sandra Savignon（2009）は、コミュニケーション

能力の構成について文法能力、談話能力、方略的能力、社会言語能力の四つを挙げ、図2のように示している。

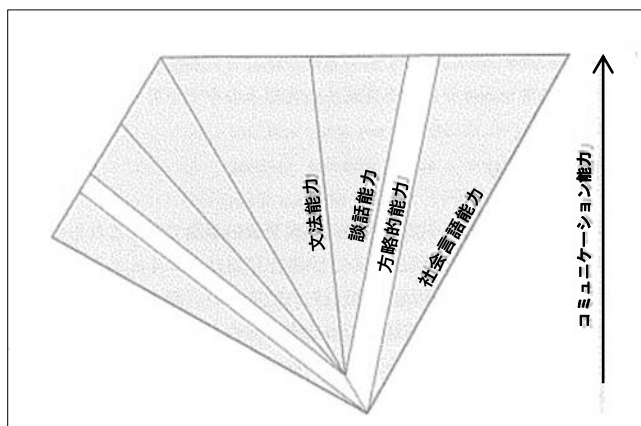


図2 Savignon (2009) が示したコミュニケーション能力の構成⁴⁾

ピラミッドを逆さにしたようなこの図は、統合的なコミュニケーション能力が発達する過程における四つの能力の関係を示している。四つの能力がそれぞれどのような力なのかについては、次のとおりである。

【文法能力】

言語の語彙的、形態的、統合的そして音韻的な特徴を認識し、それらの特徴を使って表現や文を形成する能力。

【社会言語能力】

話し手と聞き手の関係、会話の目的などからなる社会的な文脈を判断して、状況に応じて意味上、形式上、適切な文を発話・理解するための知識とその運用能力。

【談話能力】

単なる文の羅列ではなく、意味のある談話を作り出し、理解する能力。会話全体として筋が通っている「一貫性」や前後の流れがきちんとつながっている「結束性」などがその例として挙げられる。

【方略的能力】

コミュニケーションが失敗する可能性のある多種の要因に対処する能力。

特に、この図で興味深いのは、文法能力や談話能力の習得よりも前に、方略的能力や社会言語能力が存在するという点である。このことから、相手とコミュニケーションしたいという気持ちであったり、ジェスチャーや表情などを使ったりしながら、コミ

ュニケーションが成立する場合もあるということが分かる。小学校外国語活動においては、特にこの社会言語能力や方略的能力を育てていくことが重要であると考えられる。

さらに Savignon (2009) は、方略的能力がすべてのレベルにおいて見られることにも触れ、文法能力、談話能力、社会言語能力の知識が増えていくにつれ、他に占める重要性は減っていくことを述べている。また、四つの能力の関係は、すべてのレベルにおいてそれぞれの能力同士が深く互いに影響し合う性質をもつことを忘れてはならないと述べている。

このように、コミュニケーション能力の全体像は、常に部分的な能力を単に合計したものではないということが分かる。

卯城・蛭田勲 (2009) も、コミュニケーション能力には様々な定義があるとした上で、Canale (1983) が示した「文法的能力」「社会言語能力」「談話能力」「方略的言語能力」の四つの能力を挙げている。また、小学校外国語活動においては、児童の語彙や表現が限られている中で行われるため、相手の言っていることが分からなかったり、伝えたいことが相手になかなか通じなかったりなどの事態に直面した場合に、方略的言語能力を駆使した即興性が試されると述べている。「もう一度大きな声で話してみる」「ゆっくり繰り返す」「ジェスチャーで示してみる」など様々な試みが可能で、このような体験の積み重ねがどんな場面でもあきらめない姿勢を育て、相手に自分のことを伝えたい気持ちを大切に、身振り手振りも交えながら、自分の意思を表現しようとする行動力を養うことにつながるとも述べている。

これらのことから、小学校段階では特に方略的能力を駆使する場面が多いことが分かる。

一方で、従来のコミュニケーション能力を四つの能力などの集合として捉えていくことについて異を唱える考え方も見られる。

田中茂範・吉田研作・加藤由美子 (2012) は、コミュニケーション能力を四つの能力の集合として捉え、個別能力の細分化を図るというやり方で定義すると、コミュニケーション能力の全体が四つの能力の構成リストで終わってしまうと述べ、四つの構成要素の有機的な連関が見えにくいとしている。そこで、コミュニケーション能力を定義する際に、実際に英語を使用するというコンテキスト（文脈）に注目し、言語運用と言語知識の相互作用を重視することとした。具体的には、「聞く」「話す」「読む」「書く」という4技能をタスク（task）という概念で捉え直し、どういうタスクをどれだけ機能的にハンドリング（処理）できるかということに着眼し、「どういうタスクをどういう言語で行うか」という整理をしている。

また、萬谷隆一（平成23年）は、小学校外国語活動

で育てるコミュニケーション能力の素地について、「大きく関心・意欲・態度にかかわる『情意的素地』と音声・表現の慣れ親しみににかかわる『技能的素地』の二つの側面で考えることができます。」⁵⁾と述べている。そして「小学校外国語活動では、この二つの素地のどちらも目標に据えて取り組むことになっていますが、技能的素地の育成のみを追求することは抑制され、情意的素地の育成がより重視されています。」⁶⁾とも述べ、情意面の重要性を示している。

以上のことから、本研究では、コミュニケーション能力を Savignon (2009) や卯城・蛭田 (2009) が定義しているように四つの能力とし、四つの能力同士が深く関係していることも含めて定義したい。

また、本研究における小学校・中学校・高等学校で目指すコミュニケーション能力について図3に示す。図3のように小学校・中学校・高等学校で目指すコミュニケーション能力の核には「コミュニケーションマインド」がある。この部分が、コミュニケーションを支える大切な情意面の部分であり、松畑熙一 (2014) が述べているようにコミュニケーションへの積極的な態度だけでなく、言語や文化に関するローカルな視点（地域を主体にして）とグローバルな視点（世界的な感覚や思考をもつ）も含んだものと規定する。

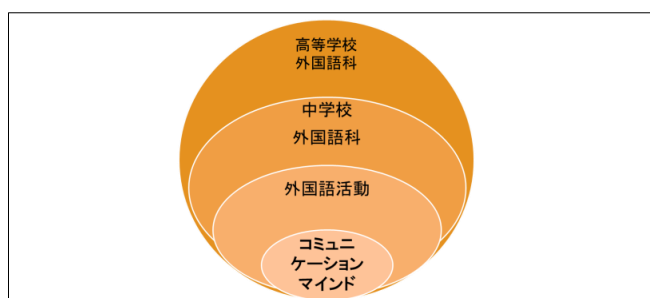


図3 本研究における小学校・中学校・高等学校で目指すコミュニケーション能力の広がり

3 外国語活動の成果と課題

平成23年度から完全実施となった外国語活動は、今年度4年目となる。平成25年度から教材も「英語ノート」から「Hi, friends!」となった。その間に国の調査等から出された成果と課題を表4に示す。

また、平成25年度には、全国の小学校のうち、「研究開発学校制度」を活用して小学校の低学年・中学年から英語教育を実施している学校や「教育課程特例制度」を活用して学習指導要領等の教育課程の基準によらない特別の教育課程の編成、実施をしている学校が約3000校あった。それらの学校を対象にした「小学校における先進的な英語教育に関する調査」では、表5に示すような結果が得られている。

以上のことから、外国語活動における一定の成果はみられているが、生徒が小学校外国語活動の中で

表4 外国語活動の成果と課題⁽²⁾

成果	課題
- 外国語活動の授業や英語について肯定的な考えをもつ児童の割合は約7割 - 中学生の約8割が小学校外国語活動で行ったことが、中学校外国語科で役立っていると考えている	7割以上の生徒が、小学校で英単語や英語の文を読んだり書いたりしたかっと思っている

表5 小学校における先進的な英語教育に関する調査結果⁽³⁾

項目	結果
授業時数	- 学年が上がるにつれて、授業時数も増加 - 第1学年から第4学年までは年間34時間以下の学校が多く見られる
指導内容	- およそ7割の学校が、現行学習指導要領に準じて指導を行っている - 中学校と連携できている学校は少ない
指導上の課題	- 指導者の指導力や指導内容についての課題が多く見られる - 外部人材の確保等の体制面においては比較的課題を感じていない傾向にある - 小中連携において課題が多い

「読む」「書く」といった内容について「やってみたいかった」という気持ちをもっていたことも明らかとなった。また、全国において先進的な取組が始まっている現状も見られ、小中連携や指導者の指導面に対する課題も見られていることが分かった。

4 広島県における外国語活動の取組の現状

広島県では、平成25年度の「小学校における先進的な英語教育に関する調査（文部科学省）」において、広島市、福山市を除く公立小学校のうち、68校が小学校第1学年からの外国語活動に取り組んでいるという回答が得られた。

今年度は、市町ごとに「挑戦加配」を設けるなどして、小学校の第1学年及び第3学年からの取組を開始した市町もある。

外部人材の多くはALTで、市町ごとに時間数等の違いはあるが、中学校区に配置されている場合が多いことも分かった。そのため、同じALTが該当の中学校に入学する学区内の小学校においても授業を実施しており、小中の連携を担っていることも分かった。また、地域によっては中学校教諭が定期的

に小学校の外国語活動の授業にティーム・ティーチングとして加わり、小中連携の一環として取り組んでいるところも見られた。

広島県は、全国に先駆けて外国語教育における小中連携に取り組み、平成23年12月に「広島県外国語科スタートカリキュラムの作成のポイント」を示した。広島県内の中学校区では、スタートカリキュラムを作成し実施している。しかし、教育センターにおける専門研修講座において小中連携の課題について協議をしたところ、「音声から文字へのなめらかな接続が難しい」「小学校段階で英語が嫌いになっている場合も見られる」などの意見が出された。

以上のことから、広島県においても全国に見られる結果と同様に、低学年・中学年からの取組が開始された学校が増える一方で、小中連携における課題の中には、音声から文字への移行に関するものも見られることが明らかとなった。

Ⅲ 小学校6年間の到達目標について

1 到達目標とは

中山兼芳（2001）は、小学校英語教育の到達目標を掲げるに当たっては、その開始時期、週及び年間当たりの学習時間、そして、どのようなクラス編成で行うかが、まず分かっているなければならないとしている。その上で、①何を②どの程度まで③どんな意図で④どんなふうに教えるかが決まってくるとしている。

加えて、中山（2001）は、広義の到達目標は①～④までの四つを含むが、このうち①何を②どの程度までは、直接言語にかかわる部分で、狭義での到達目標としている。しかし、なぜ小学校から英語を教えるのか、その原点に戻ってみると、③どんな意図で④どんなふうに教えるかによって同じ言語材料でも全く異なった様相を帯びてくるとしている。

また、吉田（2003）は、小学校からの英語（外国語）教育の良し悪しを論じるときに、最も大きな問題となるのは、明確な目標の設定であると述べ、特に何のために小学校で英語教育をやるのか、小学校時代に何ができるようになればよいのかを明らかにすることの重要性を示唆している。

その上で、到達目標を明確にし、それを実現するためには、どのようなプログラムが必要なのかを体系的に示し（カリキュラム）、次に、そのプログラムの各段階で、どのような内容のものを教えるのか（シラバス）を考えなければならないとしている。

しかし、様々な到達目標を見たときに、①と②については述べられているものの、③や④が読み取りにくいものが多く見られた。到達目標をより明確にするためにも、「③どんな意図で」（何のために外国

語を学ぶのか）、「④どんなふうに」（指導方法）について今一度考えていく必要があると考える。

このことから、本研究では、到達目標を四つの要素（①何を②どのように③どんな意図で④どんなふうに教えるか）を含んだものとして定義し、次では、③に焦点を当てて述べる。

2 何のために外国語を学ぶのか

(1) 外国語を学ぶということとは

到達目標の要素である「③どんな意図で」を明らかにするために、何のために外国語を学ぶのかということについて整理をしておきたい。

伊藤克敏（2001）は、小学校における外国語教育に関する研究書として広く読まれている Curtin & Pesola（1994）の論文を引用し、児童期に外国語を習得することによって母語への新しい視点が与えられ、母語をより深く理解するようになると紹介している。

また、高島英幸（2011）は、外国語を学ぶ意義として、次の2点を挙げている。1点目は、異文化に触れることや異文化を知ること、2点目は、日本語と同じようにことばとして感じることである。

さらに、佐藤学（2011）は、英語を学ぶことの意義について日本語を教養として支えるためには、外国語の学びを必要としていると述べている。

これらのことから、外国語を学ぶことによって母語への理解が深まるという点や異文化を知る等という点が生まれることが分かった。しかし、外国語を学ぶという究極的な目標とは何なのだろうか。児童生徒から「なぜ、外国語を学ぶのか」と問われたときに、どのように答えればよいのだろうか。

松畑（平成14年）は、英語を学ぶということを日本語という生活世界で生きている日本人が、英語という新たな生活世界に根ざしたことばを学ぶことと整理している。更に、英語を学ぶことの究極的な目標について、次のとおり「より良き日本人・地球市民を目指す」ことを挙げている。

- | | |
|--------------------------------|------------|
| (ア) 日本文化・日本語を背景とした日本人が、 | 〈主体・日本人〉 |
| (イ) より良き日本人・地球市民を目指して | 〈究極的目標〉 |
| (ウ) 主に英米文化を背景とした英語を外国語として学び、 | 〈内容：言語・文化〉 |
| (エ) 英語を通しての異文化コミュニケーション能力を育てる。 | 〈直接的目標〉 |

英語教育という営みについて⁷⁾

また、松畑（平成14年）は、英語を学ぶことを通して、ことば・文化・人間のつながりを学ぶことに連結していく姿を求めたいとしている。

これらのことから、外国語を学ぶということは、英語を通してのコミュニケーション能力を育成するという直接的な目標を通して、究極的には、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培い、ことば・文化・人間のつながりを学ぶことにつながらなければならないことが分かる。

次に、外国語を学ぶということを「ことばを学ぶ」という視点で捉えると、どのように整理できるかについて述べる。

(2) ことばを学ぶということとは

松畑(平成14年)は、「ことばは具体的な場面で生きているもの」と定義した上で、生きた存在としての英語をできるだけ「取れたての」言語食材として生かす方法を考えるのが英語教師の務めだと述べている。その上で、文法・訳読偏重の形式的学習の積み重ねには血が通わないため、音声が優先されるべきであると述べている。「ありがとう」という一言が生きてくるのも、場面に生きた音声を通してのからと例を挙げている。

また、ことばの特性として、どこに視点を置くかによって同じことが違った言い方になることを挙げている。その例として、次の図4のような例を紹介している。

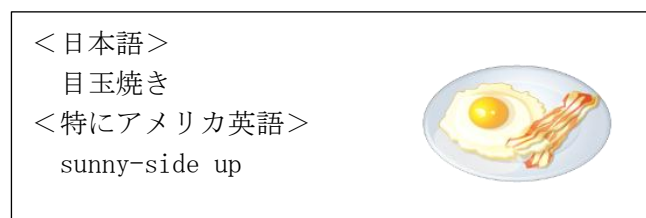


図4 日本語と英語での言い方の違いの例

同じ卵焼きでも、日本では黄身の部分を目玉のように捉え「目玉焼き」と呼んでいる。一方、アメリカでは白身の部分を雲と捉え、黄身の部分を太陽と捉え「sunny-side up」と呼んでいることが分かる。

このように同じものでも視点が変わることで、言語表現が変わることも、ことばを学ぶ大切な視点と言える。

これらのことから、ことばを学ぶということは、それぞれの視点、いわば見方や考え方、ひいては、ことばの向こう側にある文化についても学ぶことにつながると考える。

3 「英語教育改革実施計画」にみる到達目標について

(1) 「英語教育改革実施計画」にみる到達目標とは 到達目標の要素である「①何を」「②どの程度ま

で」を考えていくに当たり、まず、平成25年12月13日に文部科学省が発表した「英語教育改革実施計画」を基に考える。この計画では、初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る案が示された。具体的には、表6に示す。

表6 グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方

小学校中学年 活動型 週1～2時間程度	○コミュニケーション能力の素地を養う ○学級担任を中心に指導
小学校高学年 教科型 週3時間程度 「モジュール授業」も活用	○初歩的な英語の運用能力を養う ○英語指導力を備えた学級担任に加えて専科教員の積極的活用
中学校	○身近な話題についての理解や簡単な情報交換、表現ができる能力を養う ○授業を英語で行うことを基本とする
高等学校	○幅広い話題について抽象的な内容を理解できる、英語話者となる程度流暢にやりとりができる能力を養う ○授業を英語で行うとともに、言語活動を高度化（発表、討論、交渉等）
※小・中・高を通じて一貫した学習到達目標を設定することにより、英語によるコミュニケーション能力を確実に養う ※日本人としてのアイデンティティに関する教育の充実 （伝統文化・歴史の重視等）	

では、小学校の高学年で目指す姿に示されている「初歩的な英語の運用能力」とはどのような力を指すのだろうか。同じく「英語教育改革実施計画」の中では、英語教育の目標・内容等の案として次頁のように示されている。

このことから、初歩的な英語の運用能力とは、聞く・話すに加え、「読む」「書く」も含んでいることが分かる。したがって、到達目標の「①何を」については、「聞くこと」「話すこと」に加えて、「読むこと」「書くこと」も含まれることとなる。ただし、「②どの程度まで」については、初歩的な英語の運用能力をどう捉えるかについては明記されておらず、上に示したものも例として挙げられている。小学校第

【小学校高学年】

○教科型

○専科教員の積極的活用

○目標：読むことや書くことも含めた初歩的な英語の運用能力を養う

例) 馴染みのある定型表現を使って、自分の好きなものや、家族、一日の生活などについて、友達に質問したり、答えたりすることができる。

6 学年の最終段階に「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」については、どの程度まで目指していけばよいのだろうか。次に、初歩的な英語の運用能力について述べていく。

(2) 初歩的な英語の運用能力とは

国が「英語教育改革実施計画」において示している案において、高学年の目標の中に「初歩的な英語の運用能力を養う」という文言がある。ここでは、「運用能力」と「初歩的な英語」という部分について整理する。

まず、「運用能力」については、言語能力と運用能力を区別する必要がある。Savignon (2009) は、言語能力 (competence) と言語運用 (performance) には理論的な違いがあるとし、次のように区別している。

言語能力 (competence)

人間に内在化された能力

知っていること

運用能力 (performance)

言語能力が明示されたもの

行うこと

松畑 (1983) は、子供の言語習得モデルの仮説の一つとして Process Models を挙げ、言語能力と言語運用の両面を考慮しようとするものと説明している。話者がいかに文法的な文を生み出すかだけではコミュニケーションが成立しにくいことを示し、例として “Could you open the door?” という文を挙げている。言語能力だけであれば、聞き手に「戸を開けることが物理的にできたかどうか」を尋ねていることになるが、実際には場面の情報から「ドアを開けてもらえないか」という要求をしていると推測される。聞き手は、“Yes, I could.” という答えだけを求めているのではなく、例えば “OK.” と答えながら、ドアを開けてもらえることを求めている。このことを推測して行動できれば、コミュニケーションが成立したと言えるのである。

これらのことから、運用能力とは、単語や表現などの知識を使いながら、実際の場面の中で推測し、自分の考えを伝えたり、相手の思いを理解しようとしたりする力と捉えることとする。そしてこの力は、図 3 で示したコミュニケーション能力の核となる「コミュニケーションマインド」と深く関係していると言える。

次に、「初歩的な英語」については、現行の中学校学習指導要領の外国語科の目標に用いられている文言である。中学校学習指導要領解説外国語編 (平成20年) では、「なお、目標の中に『初歩的な英語』とあるが、これは『2 (3) 言語材料』に示された語や文法事項などの範囲の英語を指している。」⁸⁾と示されている。言語材料については、表 7 に示す。

表 7 中学校学習指導要領解説における言語材料について ⁽⁴⁾

音声	現代の標準的な発音、語と語の連結による音変化、語、句、文における基本的な強勢、文における基本的なイントネーション
文字及び符号	文字及び終止符、疑問符、コンマ、引用符、感嘆符、アポストロフィー、コロンの、ハイフン等
語、連語及び慣用表現	1200語程度の語や in front of などの連語、excuse me などの慣用表現
文法事項	文や文構造、代名詞、動詞の時制、形容詞及び副詞の比較変化、to 不定詞、動名詞、現在分詞及び過去分詞の形容詞としての用法、受け身等

表 7 を見ると、小学校で扱うには難しい内容も多く含まれていることが分かる。中学校学習指導要領解説外国語編で使われている「初歩的な英語」をそのまま定義にすることは難しいと考える。そのため、改めて「初歩的な英語」を定義し、目指す姿を明確にすることが求められる。では、具体的な到達目標の例にはどのようなものがあるのかについて考えるため、様々な例を挙げていく。

4 様々な到達目標の例について

吉田 (2003) は、小学校を卒業した時点で、英語で何ができるようになればよいのかについて、一つの例を示している。

1. BICSの基本 (日常会話に必要な簡単な会話表現、及び使用)
2. 言語活動に必要な指示表現などの理解と、応答の仕方

1 について吉田（2003）は、BICS（Basic Interpersonal Communication Skills: 対人関係処理するための基本的コミュニケーションスキル）の具体として、外国人と接した際に必要となる、基本的なあいさつや質問表現、そして簡単な応答表現を挙げている。いわゆる「教科書」を使った英語の勉強よりも、日常的に、子供にとって必要となるであろう表現を身に付けることの大切さを述べている。

2 についての具体としては、ゲームや歌、あるいは、何らかの英語のタスク（例えばALTの出身地をアメリカの地図で探すなど）を行う際に必要な、先生からの指示の理解、分からなかったときの質問の仕方などを挙げている。また、“Stand up. Open your textbooks. Listen to the tape. Repeat after me.”などの、授業を運営する上で役立つ英語、いわゆるクラスルーム・イングリッシュも含まれるとしている。

この例から「②どの程度まで」の部分を読み取ると、日常会話に必要な簡単な表現を使用するということと、簡単な指示については理解することも求められている。しかし、「読むこと」「書くこと」については、読み取りにくい。

五島忠久（1981）は、0歳から12歳までを三つのグループに分けて、基本的到達目標の設定の試みを行っている。グレード1は、0～6歳、グレード2は、7～9歳、グレード3は、10～12歳である。三つのグループそれぞれの目指す言語的分野の基本的到達目標を表8に示す。

表8から、「②どの程度まで」の部分を読み取るために、グレード3の姿を見ていく。小学校第6学年が該当するグレード3では、初歩的な英語を用いて要点が伝わるように話すことができるというもののや、基本的な単語や文を読んだり書いたりできるような目標設定となっている。吉田（2003）の示した例よりも難しいことが分かる。また、4技能すべてにふれているだけでなく、文末がすべて「できる」という表現や「正しく」という文言も含まれており、それぞれの姿に対して、正しさやできるところまで求めている部分も特徴である。

影浦攻（2008）は、英語の学習を経験した年数ごとに到達目標を設定している。例えば、年間35時間程度の英語活動の時間を経験している子供は「英語経験年数1年生」と呼び、年間35時間程度の英語活動を2年間経験している子供は「英語経験年数2年生」と呼んでいる。英語活動を第4学年から開始するのであれば、第4学年は「英語経験年数1年生」に該当することになる。影浦（2008）が示した「英語経験年数1」から「英語経験年数4」までの到達目標を次頁表9に示す。

この例から「②どの程度まで」の部分を読み取るために、中学年の第3学年から英語に取り組んだと

表8 五島（1981）が示したグループ別の到達目標^⑤

グレード1	①英語の単語や簡単な文を正しく発音できる。 ②身の事物や絵などを見て、英語の単語や文で言い表すことができる。 ③初歩的な英語を聞いて、簡単な事柄の意味を理解することができる。 ④初歩的な英語の質問を聞いて、答えたり、簡単な事柄を英語で話すことができる。
グレード2	①英語の単語や簡単な文を正しく発音することができる。 ②身の事物や絵などを見て、英語の単語や文で言い表すことができる。 ③初歩的な英語を聞いて、事柄の概要をとらえながら意味を理解することができる。 ④初歩的な英語の質問を聞いて、答えたり、簡単な事柄を英語で話すことができる。 ⑤英語の単語や文を正しく音読することができる。 ⑥アルファベットや基本的な英語の単語の綴りを正しく書くことができる。
グレード3	①英語の単語や文を正しく発音できる。 ②事物や絵などを見て、英語の単語や文で言い表すことができる。 ③初歩的な英語を聞いて、事柄の要点をとらえながら意味を理解することができる。 ④英語の簡単な質問に答えたり、簡単な事柄について初歩的な英語を用いてその要点が伝わるように話すことができる。 ⑤英語の文や数文からなるパラグラフを正しく音読することができる。 ⑥英語の基本的な単語や文を正しく書くことができる。

仮定し、英語経験年数4の姿を見ていくことにする。

まず、注目すべき点は、「読むこと」と「書くこと」の扱いである。表8の五島（1981）の例では、「読むこと」と「書くこと」が同時に扱われているが、影浦（2008）の例では、英語経験年数3において「読むこと」が登場し、次の英語経験年数4において「書くこと」が追加されている。そして、「聞くこと」「話すこと」についての文末と、「読むこと」「書くこと」についての文末が異なっている部分である。「聞くこと」「話すこと」については「聞く」「話す」という姿で文末が終わっているが、「読むこと」「書くこと」については、「できる」という意味合いをもつことばが使われている。

これら三つの例から、「②どの程度まで」を考えたときに、共通する部分は「日常」であったり「身の」であったりする場合設定である。また、文末については様々ではあるが、発達段階を踏まえて、聞

表9 影浦（2008）が示した英語経験年数別の到達目標⁽⁶⁾

英語経験年数1	【聞くこと】 ①学校のあいさつに慣れる。 ②実物・絵等を使って、身の回りのものについて英語を何度も繰り返して聞く。 【話すこと】 ①学校でのあいさつをする。 ②実物・絵等を使って、身の回りのものについて英語を楽しみながら繰り返したり話したりする。
英語経験年数2	【聞くこと】 ③実物・絵・動作で表すことのできる語句や表現を使って、友達や学校生活について楽しみながら聞く。 ④実物・絵・動作で表すことのできる語句や表現を使って、友達や学校生活や家族のことなどの話題を楽しみながら聞く。 【話すこと】 ③実物・絵等を使って、友達や学校生活を話題にして、英語を楽しみながら話す。 ④実物・絵・動作で表すことのできる語句や表現を使って、友達や学校生活や家族のことなどの話題を楽しみながら話す。
英語経験年数3	【聞くこと】 ⑤実物・絵・動作で表すことのできる語句や表現を使って、友達や学校生活や家族のことや社会生活の関わりのあることなどの話題を楽しみながら聞く。 【話すこと】 ⑤実物・絵・動作で表すことのできる語句や表現を使って、友達や学校生活や家族のことや社会生活の関わりのあることなどの話題を楽しみながら話す。 【読むこと】 ①絵等と音声を中心として文字と一緒に提示する。ただし、文字については意識的に言及しない。 ②絵等と音声を中心として文字と一緒に提示する。ただし、文字を一まとまりとしてイメージでとらえるようにする。 ③絵等と音の助けを借りて身の回りの単語が何となく読める。 ④絵等を見ながら身の回りの単語が読める。 ⑤絵等の助けなしで単語が読める。
	【聞くこと】 ⑥実物・絵・動作で表すことのできる語句や表現を使って、友達や学校生活や家族のことや社会生活の関わりのあることや簡単な自己紹介などを楽しみながら聞く。

英語経験年数4	【話すこと】 ⑥実物・絵・動作で表すことのできる語句や表現を使って、友達や学校生活や家族のことや社会生活の関わりのあることや簡単な自己紹介などを楽しみながら話す。 【読むこと】 ⑥絵等と音の助けを借りて易しい文が何となく読める。 ⑦絵などを見ながら易しい文が読める。 ⑧単語と単語の区切りやピリオドなどの知識を身に付ける。 ⑨アルファベットの大文字と小文字の区別が分かる。 ⑩アルファベットが読める。 【書くこと】 ①アルファベットの大文字や小文字の区別が分かる。 ②アルファベットを見ながら大文字や小文字が書ける。 ③身の回りの単語を見ながら写すことができる。 ④身の回りの単語を聞いて書くことができる。 ⑤易しい文を見ながら写すことができる。 ⑥単語と単語の区切りやピリオドなどの知識を生かして書くことができる。
---------	---

くこと、話すことから読むこと、書くことへ移行しており、内容が少しずつ難しいものになっていることが分かる。また、文字の導入については、音声への慣れ親しみが十分に行われた後に導入されていることが分かる。しかし、最終段階の到達目標を明確にするには至らなかった。さらに、到達目標を明確にするために、他の例についても述べていく。

5 小学校第6学年の最終段階にどんな姿を目指すのか

表4の外国語活動の成果と課題にまとめたように、7割以上の生徒が、小学校で英単語や英語の文を読んだり書いたりしたかったと思っていることが明らかになっている。このことから現在の「聞く」「話す」に加え「読む」「書く」についても触れることが考えられる。

小学校第6学年の最終段階ではどのような姿を目指すのが適切と言えるのかについて、先に述べた以外の例についても挙げ、考えていきたい。

ARCLE編集委員会（2005）は、図5のようにコミュニケーション能力の獲得を発達的に捉える観点として“spiral communication progress”という概念を

紹介している。

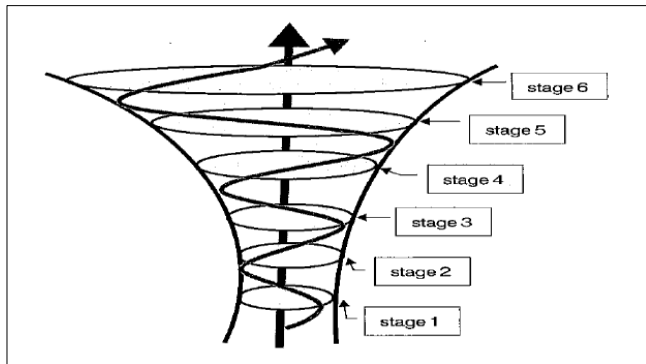


図5 らせん状コミュニケーション発達モデル⁹⁾

この概念は、コミュニケーション能力を量的にのみ規定しようとする試みから、質的規定と量的規定の両面を取り込む際の重要な概念としている。ARCLE編集委員会（2005）は、この図について、「幼児が成長し、発達段階が進むと、関わりの世界は広がり関わり方も違ってくる。このプロセスは、個人が一生を終えるまで進む。それぞれの発達段階で関わる世界をらせんの局面として捉え、らせん状にコミュニケーションの世界が展開するという意味合いをこめて、spiral communication progress と呼ぶことにする。個人の中では、その展開は非可逆的であり、老齢期に入っても、やはり新しいコミュニケーション世界を経験するということを念頭におき、“progress”という積極的な響きを伴う用語を用いる。」¹⁰⁾と説明している。

この図において小学校第6学年は、12歳に当たるため、stage 4（12～14歳）に位置付くことになる。では、stage 4では、どのような姿が示されているのであろうか。姿の例を右に示す。

このイメージとともに、どのようなことができるのかの具体が示されており、その内容は、次のとおりである。

（初歩的な英語を使って）

- ・「理科の実験や社会科での実態調査の結果」について、クラス内で5分程度の発表を行う。
- ・「1週間を振り返ってみて気になったこと」をA4で1枚程度にまとめる。

この内容は、今までの例よりもさらに高度な内容を扱っており、「書くこと」についてA4で1枚程度でまとめる力が付いていることになる。しかし今

理解可能な語彙数：2000語

Overall 英語を自覚的に学ぼうとする段階。英語を学習するという意識が強くなるため、表現することにためらいを感じるが出てくる。しかし、そうしたためらいを乗り越えれば、英語で何かを表現したり相手と対話したりすることに対して積極的になり、英語を表現のメディアとして使うことのおもしろさを体験することができる。自分のこと（考え・気持ち）を述べたり、相手に働きかけて何かをしてもらったり、将来的な展望について語るといったことに、かなり自信を持つことができる。語彙力は、まだ十分とはいえず、生の資料を読む場合は、辞書を引くことが多いが、日常よく使われる語彙については、使い切ることはできないまでも、既習語彙であるという自覚を持っている。構文的には、比較的基本的なものに限定され、情報の流れを理解する際に、ひっかかりを覚えることがあるが、英語構文の本質の部分は理解できている。自分で英語を編成しているという自覚が持てるようになる。

Stage-4：【12～14歳】；level-5（レベル数＝5）における到達可能な英語コミュニケーション能力のイメージ¹¹⁾

までの例と違い、具体的な場面が設定されており、英語を使って何ができるようになるかという点においては、とても分かりやすい。では、stage 3（9～11歳）では、どのような例が挙げられているのだろうか。次にstage 3（9～11歳）の具体を示す。

- ・外国の子供（たち）に「日本の子供の遊び（どのような遊びがあるか、男女でどう違うかなど）を説明する。

次に、キース・モロウ（2013）は、欧州評議会（Council of Europe）作成の「ヨーロッパ言語共通参照枠」（Common European Framework of Reference for Languages：Learning, teaching, assessment. Cambridge University Press, 2001）を紹介している。これは通称CEFRと呼ばれ、欧州評議会に属する各国が言語教育政策、カリキュラムやシラバスの作成、指導、学習、その結果としての言語力の評価等の点で依拠すべき共通の枠組みとして作成されたものである。CEFRの中核は、共通参照レベル、つまり全体的尺度であると述べ、表10のように言語運用力のレベルをA1からC2までの6段階に分け、学習者があるレベルで何ができるとよいかを明確にしている。

このようにCEFRの考え方は、人が言語を使って行うことに焦点を当てている。例えば、A1レベルに

表10 共通参照レベル：全体的尺度¹²⁾

熟達した言語使用者	C2	聞いたり読んだりしたことを、ほとんどすべて苦勞せずに理解できる。 聞いたり読んだりした様々な情報源から得た情報を要約し、その議論や説明を首尾一貫した形で再構成することができる。 より複雑な状況においても、自分の考えを即座に非常に流暢にかつ正確に、細かいニュアンスを区別しながら表現することができる。
	C1	多種多様な長く難しいテキストを理解し、含意まで認識できる。 あからさまに言語を探したりすることはなく、流暢に即座に自分の考えを表現できる。 社会的、学問的、専門的な目的のために、言語を柔軟かつ効果的に使うことができる。 文章構成、接続表現、結束表現を十分に使い、複雑な話題について明確でよく構成された詳しいテキストを産出できる。
自立した言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的議論も含め、具体的な話題や抽象的話題についての複雑なテキストの要点を理解できる。 母語話者との通常のやりとりが、互いに負担なく、ある程度流暢かつ自然にできる。 幅広い話題について明瞭で詳細なテキストを産出し、多種多様な選択肢についてその長所と短所を挙げながら、時事問題についての自分の考えを説明できる。
	B1	仕事、学校、余暇などで日常的に出会う身近な事柄についての明瞭で標準的な話の要点を理解することができる。 身近で個人的に関心のある話題について、簡単なまとまった文章を産出できる。 経験、出来事、夢、希望、大望などについて記述し、意見や計画について理由や説明を手短かに述べるができる。
基礎的言語使用者	A2	最も直接的な分野（例：個人または家族に関する基本情報、買い物、地元の地理、仕事）に関わる文や頻繁に使われる表現を理解できる。 身近で日常的な事柄についての簡単で直接的な情報交換を必要とするような、単純で決まりきったタスクにおいて意思疎通ができる。 自分の経歴、身近な環境、直接必要のある分野の事柄について、簡単な表現で記述できる。
	A1	具体的な必要性を満たすために、日常よく使われる表現と基本的な語句を理解し、使うことができる。 自分自身やほかの人を紹介することができ、個人に関する詳細なこと（例：住んでいる場所、知り合い、持ち物など）について質問や応答ができる。 相手がゆっくりはっきりと話し、いつでも手助けをしてくれるならば、簡単なやりとりができる。

は「人にものを頼む」「簡単な買い物をする」「自分が住んでいる場所を説明する」、A2レベルであれば「公共の乗り物を使う」「飲み物や食べ物を注文する」などである。いわば、場面・機能中心の言語使用を重視していることが分かる。では、この表で小学校

第6学年は、どのあたりに位置付くのであろうか。
投野由紀夫ら（2013）は、CEFRを基にしたCEFR-Jを紹介している。CEFRをそのまま日本に導入する際には、課題があったため、CEFR-Jでは、表11のようにレベルを細分化している。

表11 CEFRとCEFR-Jのレベル¹³⁾

CEFR		A1	A2	B1	B2	C1	C2
CEFR-J	Pre-A1	A1.1 A1.2 A1.3	A2.1 A2.2	B1.1 B1.2	B2.1 B2.2	C1	C2

CEFR-Jにおいて、小学校段階が当てはまるのは、Pre-A1レベルと考えられる。このレベルでの具体的な姿は、表12のとおりである。

表12 Pre-A1における具体的な目指す姿¹⁷⁾

理解	聞くこと	・ゆっくりはっきり話されれば、日常の身近な単語を聞きとることができる。 ・英語の文字が発音されるのを聞いて、どの文字かわかる。
	読むこと	・口頭活動で既に慣れ親しんだ絵本の中の単語を見付けることができる。 ・ブロック体で書かれた大文字・小文字がわかる。
話すこと	やりとり	・基礎的な語句を使って、「助けて！」や「～が欲しい」などの自分の要求を伝えることができる。また、必要があれば、欲しいものを指さしながら自分の意思を伝えることができる。 ・一般的な定型の日常の挨拶や季節の挨拶をしたり、そうした挨拶に応答したりすることができる。
	発表	・簡単な語や基礎的な句を用いて、自分についてごく限られた情報（名前、年齢など）を伝えることができる。 ・前もって話すことを用意した上で、基礎的な語句、定型表現を用いて、人前で実物などを見せながらその物を説明することができる。
書くこと	書くこと	・アルファベットの大文字・小文字、単語のつづりをブロック体で書くことができる。 ・単語のつづりを1文字ずつ発音されれば、聞いてそのとおり書くことができる。また書いてあるものを写すことができる。

以上の七つの例を表13に整理した。

表13にまとめた様々な指標等を参考にし、小学校第6学年の最終段階に目指す姿を表14にまとめた。また、表13では、技能面以外には触れられていないため、関心・意欲・態度の情意面についても含むこととする。また、本研究では、この姿を目指し、6年間の系統性を考えていくこととする。

表13 到達目標例一覧（一部抜粋）

歳 学年	英語教育改革 実施計画 (平成25年)	吉田研作 (2003)	五島忠久 (1981)	影浦攻 (2008)	ARCLE 編集委員会 (2005)	キース・ モロウ (2013)	投野由紀夫ら (2013)
0							
1							
2							
3							
4			・正しく発音初歩的な英語を聞いて理解する ・初歩的な英語の質問に答える等 聞・話		・理解可能な語彙数400語 ・簡単な自己紹介等 聞・話		
5							
6							
7 小1			・上の事項に正しく音読する、アルファベットや単語の綴りを正しく書く等が追加 聞・話・読・書		・理解可能な語彙数700語 ・簡単な家族紹介等 聞・話	※CEFR A1 レベル ・自分自身やほかの人を紹介することができ、個人に関する詳細なことについて質問や応答ができる等	
8 小2							
9 小3	・コミュニケーション能力の素地を養う 聞・話			・身の回りのものについて英語を何度も聞いたり、話したりする等 聞・話	・理解可能な語彙数1000語 ・日本の子供の遊びを説明する等 聞・話・読	※CEFR A2 レベル ・身近で日常的な事柄について意思疎通ができる ・自分の経歴、身近な環境、直接必要のある分野の事柄について、簡単な表現で記述できる	
10 小4				・語句や表現を使って、友達や学校生活等について聞いたり、話したりする等 聞・話			
11 小5	・読むことや書くことも含めた初歩的な英語の運用能力を養う 聞・話・読・書		・上の事項に英語を聞いて事柄の要点を捉えながら理解する、英語の基本的な単語や文を正しく書く等が追加 聞・話・読・書	・社会生活の関わりのあることなどの話題を楽しみながら聞いたり、話したりする等 ・絵等の助けなしで単語が読める等 聞・話・読	・理解可能な語彙数2000語 ・理科の実験や社会科での実態調査の結果について、5分程度の発表を行う 聞・話・読・書	※CEFR-J Pre-A1 レベル ・一般的な定型の日常の挨拶をしたり応答したりすることができる ・ゆっくりはつきりと話されれば、日常の身近な単語を聞き取ることができる等 ・単語の綴りをブロック体で書くことができる等	
12 小6		・簡単な会話・指示表現等の理解と応答の仕方 聞・話		・簡単な自己紹介等を楽しみながら聞いたり、話したりする ・単語と単語の区切りやピリオドなどの知識を生かして書くことができる 聞・話・読・書			
13							
14							
15							
16							

※キース・モロウ（2013）の例については、ブリティッシュ・カウンシル・ミラノにおける事例を参考にした。

表14 本研究における小学校第6学年の最終段階に目指す具体的な姿の例（提言）

何のために	ことば・文化・人間のつながりを学ぶ ○地域から世界へ積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するため
何をどのように	【積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度】 ・何とかわかり、伝えようとし、間違いを恐れなくてコミュニケーションを図ろうとしている。 【言語や文化に関する事項】 ・地域を主体に発信していこうとしている。 (ローカルな視点とグローバルな視点を併せもつ)
態度面	【聞くこと】 ・日常の身近な単語を聞き取っている。 【話すこと】 ・一般的な定型の挨拶や、基礎的な語句や表現を使って自分の思いや考えを伝えている。
技能面	【読むこと】 ・ブロック体で書かれた大文字、小文字を読むことに慣れ親しんでいる。 【書くこと】 ・アルファベットの大文字・小文字や簡単な単語のつづきを書くことに慣れ親しんでいる。

IV 6年間の発達段階をどう踏まえるのか

発達段階については、「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」(平成26年9月)の中で、次のように示されている。

小学校において、中学年では、外国語学習の初期段階であり、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に重点を置いて、発達段階を踏まえた具体的な学習評価の在り方を検討する必要がある。

高学年では、教科として位置付けるに当たり、英語の特性と高学年の発達段階を踏まえながら、文章記述による評価や数値等による評価など、適切な評価方法については先進的取組を検証し、引き続き検討する。

(波線は稿者が付記した)

この文章を読み解くと、中学年や高学年という、いわゆる成長段階と、英語の特性を踏まえた評価という二つの事柄を考慮する必要があることがうかがえる。

現在、外国語活動は小学校第5学年及び第6学年に導入されており、音声を中心とした活動を行っている。一方の文字指導については、中学校からとしているが、この根拠はどこにあるのだろうか。

1 文字の導入について

シーラ・リクソン(2013)は、多くの国の学校制度を例に挙げ、言語の形式面に対する関心を促すのは、ピアジェが「形式的操作期」と呼んでいる時期に対応する中学校以上のレベルの役割だと考えられ

ていると述べている。子供たちへの英語教育に熱心になるあまり、小学校で形式的な文法の指導を前倒しして始めることは、子供たちの発達段階にそぐわないとしている。例えば、オーストラリアのような国では、小学校の英語の教師は、授業で文字を使うことが禁じられており、文字を使わずに授業ができるような特別なトレーニングを受けているほどである。その一方で、母語での読み書きに習熟していれば、外国語で読み書きを習うことは、それほど大きな負担にはならないという別の考え方についても紹介している。では、子供はどのような過程を経て、外国語の文字を習得していくのだろうか。

三浦孝(2014)は、英語を読み書く力の土台として、「意味」と「音声」と「文字」の連関の形成を挙げている。単語レベルのものを図6、文レベルのものを図7に示す。

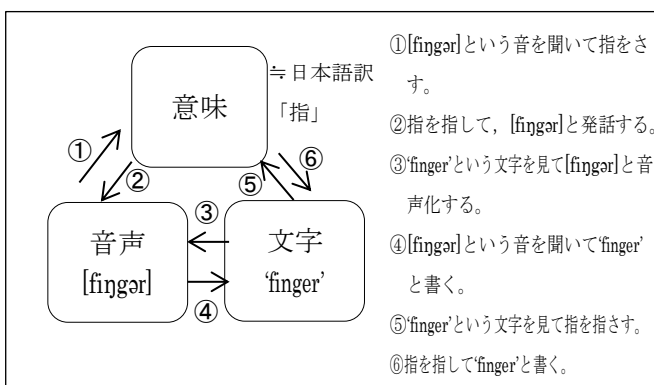


図6 単語レベルにおける「意味」「音声」「文字」の連関

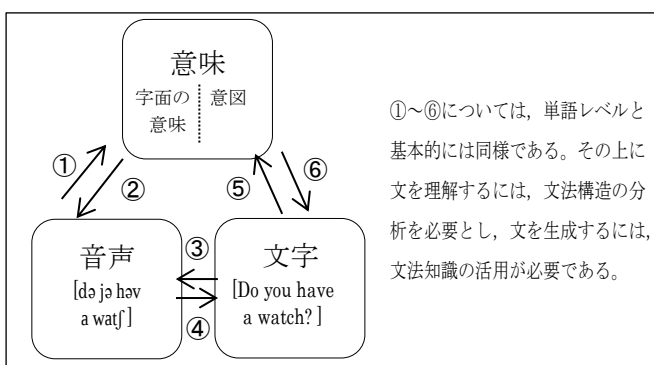


図7 文レベルにおける「意味」「音声」「文字」の連関

この図から分かるように、①～⑥のプロセスのうち、①～④までは、音声と関わりがある。小学校の外国語活動において文字を導入するためには、①～④のプロセスを十分に踏まえた上で行う必要があるといえる。

また、三浦(2014)は、学習の早い段階で英語が苦手になってしまう、つまり生じやすい困難点として、この「意味」「音声」「文字」の連関の形成ができていないことを挙げている。そして、英語が

「書けない」問題以上に「読めない」という困難はもっと深刻な英語学力不振の原因となると述べている。この理由として、言語は人間の脳内で、音声信号として処理されることを挙げ、音読できないということは、復習しようにも脳内の音声回路に乗ることができないと説明している。

中森誉之（2013）も、言語習得過程では、脳内に音声基盤が搭載された後に、音声をどのように表記（視覚化）するかを認識しながら、文字（点字）体系が学習される発達順序が存在することを述べている。また、聴解技能学習のつまずきの大きな要因として、日本語訛りの発音やルビを振った読み上げを頻繁に行うことを指摘している。外国語音声が入った時に、日本語を処理するメカニズムに依存し続けると、外国語音声処理する音韻ループ（短期記憶）の機能が新たに創成されず、外国語の音声刺激を受信することはできないとしている。その結果、学習者は、外国語音声が発読できず意味理解にまでも達することなく混乱し、困難な事態が誘発されてしまうと述べている。

これらのことから、文字の導入については、音声への慣れ親しみを十分に行った上で取り組むことが重要である。

2 小学校6年間の発達段階について

(1) 母語習得と認知発達について

母語の習得について、山岡俊比古（平成19年）は、子供の一般的な認知発達がまだ十分とは言えない5歳か6歳までにその基本がマスターされるという点で、研究者の意見の一致が見られると述べている。基本をマスターするという事は、構文を個々の具体的な事例としてではなく、個々の事例を新規に生み出すことのできる抽象的で一般的なレベルで把握しているということである。

この時期の子供は、ピアジェの唱える前操作期（2～7歳）であり、具体的操作期（7～11歳）の前段階である。このことから、母語習得については、構文の抽象化を可能にする能力として、具体的対象に対する論理的な操作以外の能力が子供に備わっていることを表している。

Tomasello, M. (2003) は、子供は単純な連想や行き当たりばったりの帰納よりも、はるかに強力な学習メカニズムを自由に使うべく所持していると述べており、さらにこの認知的能力が社会的な能力と結合する中で様々な学習が行われることを強調し、特に言語習得に関係する二つの能力を挙げている。

一つは「意図の読み取り」であり、もう一つは「パターン発見」である。前者は、子供が対話する相手の伝達意図を読み取ることであり、後者は言語形式上で同類を範疇化することである。そのため、前者が後者を支えるという関係にある。

また、Clark, E. V. (2003) は母語習得の際立った特徴として、子供が触れる入力（インプット）の豊かさを挙げている。控えめに見積もって、子供が母語習得において母語と接触する時間は1日平均10時間である。しかもこの時期の子供は、母語習得以外に没頭すべきものをもっていないと述べている。

これらのことから、母語習得においては、6歳までにその基本をマスターし、理解と表出の両方において様々な構文を一般化されてものとして身に付け、それに基づいて発話を生産的に行うことができるようになる。しかし、これは子供が触れる入力（インプット）の豊かさによるものである。

(2) 外国語学習と認知発達について

山岡（平成19年）は、外国語学習の習得と母語習得との対比をしながら主に3点の違いを述べている。

1点目は、量的な面の僅少さである。母語習得が1週間で70時間を確保するのに対し、外国語学習の公立小学校での時間は1週間で45分である。

2点目は、質に関わる場面的及び事実的な真正性に欠けている点である。場面的な非現実性に加えて、子供にとっての内面的な関わりの真正性の確保も極めて難しい。例として、子供に“I'm hungry.”という発話を内面的真正性をもって表出体験させようとすれば、子供が実際に空腹になる時まで待ち、しかもその発話が当然となるべき場面に居合わせなければならないことを挙げ、教室においてそのような状況を実現することは難しいと述べている。

3点目は、社会関係的な意味における入力（インプット）の質についても欠けている点である。母語習得に見られる子供と周りとの密接な関係の上で成り立つ交流や、子供による入力（インプット）の独占的な取得は期待できにくい。

これらの3点を踏まえ、山岡（平成19年）は、公立小学校における英語の学習と教育においては、目標の限定化とそれに伴う入力（インプット）の管理が必要となるとしている。具体的には、目標について、語彙は、小学生の生活との関連性という点で、身近なことから指すものに絞ること、文法については、基本的な疑問文とその応答文及び自己紹介に使われる基本的な平叙文に限定すること、入力管理については、子供の認知的発達における特徴的な変化に関連付けて議論する必要があると述べている。

(3) 児童期の子供の特徴について

中山(2001)は、Stevick, E. W. (1982) の「幼児・児童期の子供は感覚や運動を通して物事を捉え、記憶していく」という考えや Asher, J. J. (1969) の「右脳が運動・動作と直結して、動作を通じて言葉を塊として認知・記憶していく」という考えを紹介している。このように児童期の子供は、五感を使った学習を好むことが分かる。また、児童期は、学習・習得に最も適した時期であると述べ、児童期の子供の特徴を次の10点に要約している。

- ①豊かな想像力や連想力を持ち、想像し、推測することを好む。
- ②未完成や不完全なものを好む。すなわち、想像し、推測し、考える余地のあるものを好み、それを求める。
- ③未知のものに対して旺盛な好奇心や知識欲を持っている。
- ④物事を全体的に捉え、その核心を直感的に見抜く。
- ⑤あらゆる言語の音を聞き分け発音できる機能を持っている。
- ⑥模倣や反復練習を好む。
- ⑦リズムのある歌やライムを好む。
- ⑧口を大きく開け、大きな声を出すことを厭わない。
- ⑨ジェスチャーやアクションを喜ぶ。
- ⑩物事に対して偏見が少ない。

また、箕浦永生（2005）は、9歳前後の特徴について、次の表15のようにまとめている。

表15 9歳前後の特徴

特徴	9歳前後	9歳以降
集中力	リズムに乗って体を動かし、おもしろいと感じる間、集中する。	興味・関心のあること、知的好奇心の起こることに集中する。 理解できないことには集中できない。
歌（唄うこと）	体を自然に動かして歌を楽しむ。	体を曲に合わせて動かさない。歌の最中に自意識がある。のめり込めない。
覚え方・学び方	歌・チャンツ・文を数回聞いて、全体を口ずさむ。	各語・各行を確実に理解・暗記しようとする。
読むこと	人に読んでもらうことが好き。 自分では読めない。	読むこと・読めることがうれしい。
書くこと	書くことに向いていない。	書けることがうれしい。

また、久埜百合（2001）は、児童期の子供が聞いて分かる語彙の量と、自分で使える語彙の量について表16のようにまとめている。

表16 低学年・中学年・高学年における認識できる語彙量と自分で使いこなせる語彙量

	認識できる語彙量	自分で使いこなせる語彙量
低学年	500	250
中学年	1,000	500
高学年	2,000	750

この表から言えることは、発達段階によって認識できる語彙量と自分で使いこなせる語彙量が増えていくだけでなく、自分で使いこなせる語彙量は、決して認識できる語彙量と同じではないということである。そして久埜（2001）は、この表内の数字はあくまでも目安であるとした上で、子供だから覚えられないという理由で、語彙数を制限してしまうの

は、表現内容を貧弱なものにし、言語活動への参加意欲を抑えることにもなりかねないと注意を促している。

(4) 低学年・中学年・高学年における発達段階について

Ellis（1985）は、第二言語習得開始の年齢の影響について次の表17のように述べている。

表17 第二言語習得開始の年齢の影響について

発達段階	主な特徴
幼児期	・「感覚―運動」的にことばを捉えることができる。
低学年	・音を聞き取り文を一つの塊として捉える能力が優れている。
高学年	・論理的・分析的思考が強くなり、いわゆるメタ言語能力が発達する時期である。 ・第1言語とその他の言語とを識別できるようになる。 ・文の仕組みや語順、語形変化に興味を示す。

また、畑江美佳（2011）は、学年差による「読む」技能習得の差について次のような実験を行った。その結果が次の表18である。

○被験者 低学年及び高学年 21名ずつ

○内容 児童に馴染みのある名詞を扱った30枚のピクチャーカード（単語の綴りが印刷されている）を1週間に1度5分間の計8回、モデルの発音を聞いてリピートさせ、実験の前後で綴りのみ見せて自然な発音で読めるかどうかの個別調査を行った。

表18 低学年及び高学年における結果

発達段階	実証的に検証した結果
低学年	・単語の綴りには注意を払っていなかったため、事前0.76語から事後3.94語へ
高学年	・絵と音声と文字をつなげて認知することができ、事前3.39語から15.72語へ

この結果から分かることは、低学年は、ピクチャーカードに単語の文字が書かれているにもかかわらず、単語の文字の綴りに対して、あまり注意を払っていないということである。低学年と高学年においては、結果に5倍程度の差が生じている。ただ、低学年についても、事前よりも事後に増加しているため、全く効果がなかったとも言いきれないと考える。この結果から、文字への親しみが低学年と高学年では異なっていることが分かる。

また、中本幹子（2001）は、児童英語教育が、先取り教育にならないためにも、発達段階に合わせた教育にしなければならないことを示唆している。その上で、低学年・中学年・高学年の学習の発達段階における学習の特徴を次のように述べている。

【低学年】

- ・語彙・文章の吸収力が優れている。
- ・英語を日本語に訳することなく場面や状況で理解する。
- ・英文を機械的に丸暗記する。
- ・文を機能に応じて一つの塊として覚える。
- ・聞いた英語をそのまま模倣、発音することができる。
- ・身体を動かすことが好き。

【中学年】

- ・いくつかの英語の発音を難しく感じる。
- ・英語の言葉や文の日本語訳を考える。
- ・自分の理解度について日本語を使って確かめる。
- ・読むことや書くことが、英文の理解を助ける。
- ・英語の規則を帰納的に見付けようとする。
- ・書くこと、読むことに興味が出る。
- ・丸暗記より、創造性のある活動を好む。

【高学年】

- ・英語を一つの教科と捉える。
- ・発音面では子音の後に母音を付けたり、日本語にない音を発音する場合、一番近い日本語の音で代用したりする傾向がある。
- ・アクションの付いた歌やかわいい歌を歌いたがらない。
- ・暗記する前に英文の意味の明瞭な理解が必要。
- ・語彙、文章を日本語の訳とともに覚える。
- ・規則の提示や日本語での説明が理解を助ける。
- ・自発的にコミュニケーションを図ろうとする。
- ・創造的な活動、自己表現などに興味がある。
- ・異文化に興味がある。

以上の様々な発達段階に関する理論について、次頁の表19にまとめた。

次に英語の特性を踏まえた評価について述べる。

3 英語の特性を踏まえた評価について

松畑（1986）は、人を育てていくという視点に立つと、英語教育においては、すべてを加点法思考で取り組むべきであると述べている。そのためにも、成功体験を核にすることの重要性を挙げ、少しずつでも成功体験を積み重ねられるような工夫をするべきだと述べている。

また、松川禮子（2003）も、子供を見る評価の視点として、いわゆる「できる子」「できない子」という相対的な比較の視点は捨てる必要があるとしている。一人一人の子供に即して、その変容を捉える「個人内評価」が基本となり、評価の対象も、関心・意欲・態度が中心で、知識量や技能の上手下手を意識させないことが大切であると述べている。

さらに金森（2009）は、外国語はことばであり、ことばとは人と関わり、人とつながる道具とも考えられるとし、ことばの教育を通して育てるのは、「言語運用能力」だけでなく「社会性」でもあるはずと

述べている。次に、金森（2009）が示した評価規準の観点を挙げる。

- 関心・意欲・態度の育成
- 英語でコミュニケーションを図るための、基礎的な理解の力や表現の力の育成
- 言語や文化について知識を得る・理解する力の育成
- 社会性の育成
- 自律的学習者としての資質の育成

これらの観点には、中学校以降の外国語学習へつながる「自律的な外国語学習者として自ら学ぶ資質」を育成する観点も含まれている。

以上のことから、評価については、加点法思考で取り組むことが必要であることや、小学校だけでなく、中学校、高等学校とつながる教育の中で育てていく視点を忘れてはならないと考える。

V 指導方法の工夫について

指導方法の工夫について、発達段階を踏まえた「文字の導入」「題材」「活動の工夫」に絞って述べる。

1 発達段階を踏まえた文字の導入について

三浦（2014）や中森（2013）が先に述べているように、音声から文字へのプロセスを踏まえることが大切であると分かった。では、「意味」「音声」「文字」をつないでいくためには、どのようにしたらよいのだろうか。

(1) 低学年について

音を聞き取る力が優れており、体を動かすことが好きな低学年では、「聞く活動」を中心に「音声」と「意味」をつなぐことが大切であると考えている。聞くことに慣れ親しませる目的は、話すための土台をつくることである。

方法としては、TPR（全身反応教授法）やマイム（mime：静かに何もしゃべらないで演じること）、お話の読み聞かせ等が挙げられる。教師の英語の指示に対して、動作などの非言語的な反応をさせるもので、体を動かすが、発話はしないため、聞くことに集中させることができる。例えば、教師が先頭で「We're walking, walking…」と言いながら児童を連れて、教室をぐるぐる歩いていく。児童は、歩いているという自分の動きと、聞こえてくる「walking」をつなげることができ、「今聞こえている walking」というのは、どうやら『歩く』を表しているのだと理解していくというものである。

また、他の方法としては、英語を聞いてものを作するという方法が挙げられる。この方法であれば、児童が最初から英語を話さなくても活動でき、授業終

表19 発達段階に係るさまざまな理論の例（一部抜粋）

歳 年	ピアジェ (1963)	箕浦永生 (2005)	Ellis (1985)	畑江美佳 (2011)	久埜百合 (2001)	中本幹子 (2001)	整理した 主な特徴
0	感覚－運動 知能期						
1							
2							
3	前操作思考 期						
4			・感覚－運動 的にことば を捉えるこ とができる				
5							
6							
7 小1	具体的操作 期 ・具体的な経 験は新しい 概念を理解 するための 手助けとな る ・ことばを使 って情報交 換すること で社会性が 発達する	・おもしろい と感じる間は集 中する ・体を動かすこ とを楽しむ ・人に読んでも らうことが好 き ・書くことに向 いていない	・音を聞き取 り文を一つ の塊として 捉える能力 が優れてい る	・単語の綴り には注意を払 っていない傾 向が見られた	・認識できる 語彙量は500 語 ・自分で使い こなせる語 彙量は250語	・英語を場面や 状況で理解する ・文をかたまり として覚える ・聞いた英語を 模倣できる ・身体を動かす ことが好き	【低学年】 ・身体を使って 英語に親しむ ・音を聞き取る 力が優れている ・英語を場面や 状況で理解 ・模倣が得意 ・文字への興味 は薄い、読ん でもらうことは 好む
8 小2							
9 小3							
10 小4		・理解できない ことは集中で きない ・各語・各行を 確実に理解・暗 記しようとする ・読めることや 書けることが がうれしい	・メタ言語能 力が発達す る ・第一言語と その他の言 語とを区別 できるよう になる ・文の仕組み や語順、語形 変化にも興 味を示す	・絵と音声と 文字をつなげ て認知するこ とができる傾 向が見られた	・認識できる 語彙量は 1000語 ・自分で使い こなせる語 彙量は500語	・英語の発音を 難しく感じる ・英語の日本語 訳を考える ・読むことや書 くことが英文の 理解を助ける ・書くこと、読 むことに興味が 出る ・創造性のある 活動を好む	【中学年】 ・創造性のある 活動を好む ・英語の日本語 訳を考える ・文字への興味 が出てくる ・音声と意味を つなげようとす る
11 小5							
12 小6	形式操作期 ・抽象的問題 を含むあら ゆる種類の 問題に論理 的推理を適 用できるよう になる				・認識できる 語彙量は 2000語 ・自分で使い こなせる語 彙量は750語	・英語を一つの 教科と捉える ・日本語にない 音を発音する場 合は、一番近い 日本語の音で代 用する傾向があ る ・規則の提示や 日本語での説明 が理解を助ける 創造的な活動や 自己表現などに 興味がある	【高学年】 ・創造的な活動 や自己表現活動 に興味がある ・英語の規則性 や文の仕組み等 に興味を示す ・読みたい、書 きたいという姿 が見られる
13							
14							
15							

了後には作品として成果が目に見える良さもある。また、他の方法としては、一人一人の作品を合わせて、共同的にみんなで一つのものを作るという活動にすることもできる。内容によっては、他の国の文化を理解することにつながることを盛り込むこともできると考える。

(2) 中学年について

聞くことに慣れ親しみ、話すことの土台をつくることができれば、いよいよ聞く・話すことを通して文も含めた「音声」と「意味」をつないでいくことが目的となる。

方法としては、ライムやチャンツ等が挙げられる。単元を通して慣れ親しませたい表現等をリズムに合わせて繰り返して言う活動によって、少しずつ話すことへの自信を付けることができると考える。また、友達同士とのやりとりもできるようになるため、活動が一斉だけでなく、ペアやグループなどと工夫できるようにする。

また、中学年の特徴として、創造性のある活動も好むため、児童が決められる活動や内容を用意し自主的な学びができるようにすることも大切である。

例えば、クイズ作りなどでは、自分で考えた答えに対して、どんな順番で、どんな英語のヒントを出そうかと考えることを楽しみ、みんなで行うクイズ大会も意欲的に取り組むことができる。簡単な劇や紙芝居なども小道具や絵の力も借りながら、話すことに慣れ親しむことができる活動である。

加えて、文字への興味も生まれてくるので、絵カードなどに読ませるための文字としてではなく、一つのデザインとして頭文字のアルファベットを書き加える等して、親しませることも考えられる。

(3) 高学年について

高学年になると、文字への興味・関心が高まってくる時期である。読んでみたい、書いてみたいという児童の欲求を満たすためにも、絵カードには、絵の中に文字も組み込むことが考えられる。また、あくまでも読んだり書いたりすることには、必然性が必要であり、頑張って読んでみたい、書いてみたいという意欲を喚起させる活動設定が大切である。

「文字」と「音声」をつなぐ方法としては、歌やチャンツの中に、単語の終わりの音が韻を踏んでいるものや、単語の初めの音が共通しているものを取り入れることが考えられる。ここで大切なことは、決まりを教えるのではなく、あくまでも気付かせるということである。例えば、「りんごの apple と蟻の ant」であれば、絵カードもりんごと蟻が近くについて、おなじ「a」で始まることが視覚的に分かるようにしておく。表記上で見付けられる音のパターンから、知らない単語についても読み方の予想ができるようになる。そして、低学年であれば絵だけを楽しんでいた英語の絵本の読み聞かせから、高学年

の発達段階を踏まえると、絵の情報だけでなく文字とも内容を結び付けようとする。既習の表現が出てくる絵本などを A L T に読んでもらうことも文字への慣れ親しみにつながると言える。

また、書くことについては、お礼のカードを作成したり、インタビューなどで記録を取ったりするなどの書く必然性のある場面を用意することが大切である。まずは、文字を使う意義や良さを児童に理解させることが一番重要である。

2 発達段階を踏まえた題材について

高島（2011）は、小学校の外国語活動の授業として「プロジェクト（単元）型の外国語活動」⁽⁸⁾を挙げている。プロジェクトは、児童の興味に基づいた主体的、創造的、課題解決的な活動であるとし特徴は、次の3点である。

- 活動に解決すべき課題があり、この課題を解決する過程の中で、児童たちは、必要な活動を選択し決定するため、必然的に主体的・創造的な学びが生まれる。
- グループ学習、ペア学習、異学年交流などを通して、児童は共同の学びを体験できる。
- 課題を解決するという活動のゴールがあることで、児童は、明確な目的意識をもち活動を進め、活動への興味を持続することができる。

このプロジェクト型外国語活動を取り入れ、発達段階を踏まえた題材を選定した。題材の内容は、発達段階に合わせて、自分や身近なものから国や世界を含むものまでと広がっていくようにした。また、学習のつながりがあるように各教科等との関連や、1度学習した内容を復習しながら進められるように工夫した。題材の一覧を表20に示す。

表20 第1学年から第6学年までの題材例について

1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年
自分や身近なもの→地域を含む→国や世界を含む					
挨拶	色、形 動物	果物、野菜	学校にある もの	地域に関する もの	数字 地域に関する もの
挨拶 色	色、形 身の回りの 道具	10までの数 虫	食べ物 飲み物	アルファベットの 大文字 身の回りの もの	アルファベットの 大文字・ 小文字 身の回りの もの
色、形	色、形 身の回りの 道具	10までの数 虫 食べ物	動作を表す 言葉	アルファベットの 大文字 小文字	文化に関する もの
色、形 動物	色、形 野菜	10までの数 食べ物 飲み物	地域に関する もの	日本に関する もの	職業
動物	野菜、果物	学校にある もの	地域に関する もの	広島に関する もの	地域に関する もの 昔話
※6年生の英語劇を鑑賞					

(1) 低学年について

第1学年及び第2学年の単元計画例を資料1と2に示す。低学年における題材は、身近なものに限定し、児童の負担が少ないようにした。また、絵本の読み聞かせや生活科、図画工作科と関連させながら、みんなで作品を作る内容も盛り込んだ。第2学年の最後の単元には、自分の好きなものを紹介する単元を設定している。簡単な表現と実物等を使ったshow and tellを行い、自分のことを簡単な英語を使って紹介する機会を設けている。

題材を絞り込むことで、新出の語彙をなるべく減らし、2年間の中で何度も復習ができるように設定した。

(2) 中学年について

第3学年及び第4学年の単元計画例を資料3と4に示す。中学年における題材は、身近なものから地域へと広がりをもたせた。また、絵本の読み聞かせや図画工作科、社会科、理科等と関連させながら、共同して紙芝居等を作る内容も盛り込んだ。

第4学年の最後の単元には、自分たちの市町を紹介するCMづくりの単元を設定している。第2学年でも行ったshow and tellを行い、自分たちの市町のよさ等を英語を使って発信する機会を設けている。

また、創造性のある活動を楽しむことができるため、プロジェクト型の授業も取り入れている。自分たちで決められる範囲は少ないが、必然的な学びが生まれるように設定した。

(3) 高学年について

第5学年及び第6学年の単元計画例を資料5と6に示す。高学年における題材は、地域から世界へと広がりをもたせた。また、社会科、キャリア教育、総合的な学習の時間等と関連させながら、共同して課題を解決する内容も盛り込んだ。第6学年の最後の単元には、自分たちの市町にまつわる昔話を劇にして紹介する単元を設定している。この劇は、他学年にも全員見てもらうことで、あんな6年生になりたいという憧れをもたせることができると考える。

そして、異学年交流だけでなく、他の小学校の児童や留学生との交流など、かかわりの相手も広がっている。どんな人とも気持ちのよいコミュニケーションがとれるような機会を充実させたい。

また、文字への興味・関心も高まっていることから、アルファベット辞典を作ったり、アルファベットカードを作ったりする創造性のある活動を取り入れている。文字を読まされる、書かされるではなく、読む必然性、書く必然性のある場面をつくることが重要であり音声にはない文字のよさについて児童が気付けるようにしたい。

3 発達段階を踏まえた活動について

梅本多(2003)は、英語の学習においては、低学

年、中学年、高学年にかかわらず、「楽しいこと」を大切にしたいと述べている。楽しくないと活動に関わろうとしない児童の姿から、楽しさをどのようにして生ませるかを考えている。そして、その楽しさを生むために低学年では「体を動かす」、中学年では、「口を動かす」、高学年では、「心を動かす」とまとめている。いわゆるゲーム等の楽しさから、知的な楽しさへと移行することが大切であると述べている。かかわりの相手についても、友達から他の国の人々までと少しずつ広がりをもたせている。

また、大城賢・直山木綿子(2008)は、外国語活動の取り扱う指導内容や活動は、児童の興味・関心に合ったものを扱うことが大切と述べている。他教科との関連を図ることで①児童の興味・関心を高める②内容が理解しやすい③意味中心のリアルなコミュニケーション活動が展開しやすいという利点があると述べている。

これらのことから、児童が興味・関心をもって活動に積極的に取り組めるよう発達段階に合った各教科等との関連を図ることが重要であると言える。

以上のことを踏まえ、次頁図8に小学校6年間の到達目標例(提言)をまとめた。

VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

- 小学校卒業時の目指す姿である到達目標について、様々な文献等から整理することができた。
- 低学年・中学年・高学年における発達段階を踏まえた指導方法の工夫についても整理することができた。

2 研究の課題

- 今回作成した表を基に、実際に授業等で実践することを通して、この表の効果を見ていく必要がある。

おわりに

本研究では、小学校第6学年の卒業時の目指す姿である到達目標を設定し、低学年及び中学年における到達目標も作成した。その上で、発達段階に合ったより効果的な指導方法についても言及し、単元計画の例をまとめることができた。児童の学びをつないでいくためにも、カリキュラムの系統性は重要である。そして何よりも英語を学ぶ必然性を感じにくい環境の中で「英語を使って話してみたい、聞いてみたい」という動機付けを生むことはとても難しいが、工夫をすることで学びも主体的になると考える。

		低学年	中学年	高学年	中学校 外国語科	高等学校 外国語科	③何のために
		体を使って 英語を楽しむ	口を動かして 英語を楽しむ	心を動かして 英語を楽しむ			
①何を②どの程度まで	態度面	積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度 何とかわかり、伝えようとし、間違いを恐れないでコミュニケーションを図ろうとしている					ことば・文化・人間のつながりを学ぶ ↳地域から世界へ積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成
		言語や文化に関する事項 地域を主体に発信しようとしている 自分や身近なもの → 地域を含む → 国や世界を含む					
	技能面	聞くこと 話すこと 読むこと 書くこと					
④どんなふうに		聞 身の回りのものについて簡単な英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 話 身の回りのものについて簡単な英語を話すことに慣れ親しんでいる。	聞 日常の身近なことについて英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 話 日常の身近なことについて基礎的な語句や表現を使って自分の思いや考えを伝えることに慣れ親しんでいる。	聞 日常の身近な単語を聞き取っている。 話 一般的な定型的挨拶や、基礎的な語句や表現を使って自分の思いや考えを伝えていく。 読 ブロック体で書かれた大文字、小文字を読むことに慣れ親しんでいる。 書 アルファベットの太文字・小文字や簡単な単語のつづきを書くことに慣れ親しんでいる。			
		 ・音と意味をつなぎ、聞くことに慣れ親しませる。 ・実物や動作を伴った活動を取り入れる。	 ・音と意味をつなぎ、聞くことに慣れ親しませる。 ・文字への興味・関心を生かし言語や文化に関する気付きを生ませる。	 ・音と意味と文字をつなぐことに慣れ親しませる。 ・既習の語彙や表現を使った自己表現活動を取り入れる。 ・日本と外国との違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付かせる。			
		加法的な評価					

図8 究極的な目標に向けた小学校6年間の到達目標例（提言）

本研究でまとめたことが、現在、低学年及び中学年で外国語活動に取り組んでいる小学校や、今後取り組んでいこうとしている小学校への参考になれば幸いである。

最後に、研究指導者として熱心に御指導いただいた中国学園大学・中国短期大学長の松畑熙一先生に心より感謝申し上げる。

【注】

- (1) 文部科学省（平成26年）：英語教育の在り方に関する有識者会議（第3回）配付資料【資料3-2】外国語活動の現状・成果・課題を基に、稿者が表にまとめた。
- (2) 文部科学省（平成26年）：英語教育の在り方に関する有識者会議（第3回）配付資料【資料3-1】小学校における外国語活動の現状・成果・課題を基に、稿者が表にまとめた。
- (3) 文部科学省（平成26年）：英語教育の在り方に関する有識者会議（第3回）配付資料【資料3-1】小学校における外国語活動の現状・成果・課題を基に、稿者が表にまとめた。
- (4) 文部科学省（平成20年）：『中学校学習指導要領解説外国語編』開隆堂 pp. 31-45を基に稿者が表にまとめた。
- (5) 五島忠久（1982）：『中学英語との関連から見た早期英語教育』『英語科教育研究』大阪教育大学3巻 pp. 6-10を基に、稿者が表にまとめた。
- (6) 影浦攻・町川和子（1982）：『小学校英語の到達目標と指導のプロセス小学校英語活動の展開4』明治図書pp. 13-15を基に稿者が表にまとめた。
- (7) 投野由紀夫（2013）：『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック（CD-ROM付）』大修館書店 pp. 294-301の中から、Pre-A1に関わる内容を稿者が抜粋し、表にまとめた。
- (8) 高島英幸（2011）：『プロジェクト型外国語活動の展開』高陵社書店 pp. 11-30に詳しい。

【引用文献】

- 1) 卯城祐司・蛭田勲（2009）：『小学校教育課程講座外国語活動 平成20年改訂』ぎょうせい p. 4
- 2) 文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領』東京書籍 p. 107
- 3) 卯城祐司・蛭田勲（2009）：前掲書 p. 8
- 4) Sandra Savignon（2009）：『コミュニケーション能力ー理論と実践』法政大学出版局 p. 60
- 5) 萬谷隆一（平成23年）：『小中連携Q&Aと実践小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント』開隆堂 p. 20
- 6) 萬谷隆一（平成23年）：前掲書 p. 20
- 7) 松畑熙一（平成14年）：『英語教育人間学の展開ー英語教育と国際理解教育の接点を求めて』開隆堂 pp. 25-27, 199-200
- 8) 文部科学省（平成20年）：『中学校学習指導要領解説外国語編』開隆堂 pp. 8-9
- 9) ARCLE編集委員会（2005）：前掲書 p. 37
- 10) ARCLE編集委員会（2005）：前掲書 p. 36
- 11) ARCLE編集委員会（2005）：前掲書 p. 42
- 12) キース・モロウ（2013）：『ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）

から学ぶ英語教育』研究社 p. 189

- 13) 投野由紀夫（2013）：前掲書 p. 94

【参考文献】

- 文部科学省（平成26年9月）：『今後の英語教育の改善・充実方策について報告〜グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言』
- 山岡俊比古（平成19年）：『小学校英語学習における認知的側面ー認知的発達段階に即した学習とその促進』兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科教育実践学論集
- 加賀田哲也（2009）：『人間学的英語教育の概念構築への一考察』大阪商業大学論集151, 152合併号
- 松畑熙一（1983）：『早期英語教育 英語教育学モノグラフ・シリーズ』大修館書店
- 松畑熙一（1988）：『国際化への豊かな発想を育てる 中学校シリーズ1 英語の授業づくり』開隆堂出版
- 松畑熙一・高塚成信（1989）：『英語授業を魅力的に』大修館書店
- 松畑熙一（1989）：『自ら学ぶ力を育てる英語授業ー自己教育力の養成をめざして』研究社
- 松畑熙一（1991）：『英語授業学の展開』大修館書店
- ゾルダン・ドルニュイ（2005）：『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店
- 金森強（2011）：『小学校外国語成功させる55の秘訣ーうまくいかないのには理由があるー』成美堂
- 大岡信（2002）：『日本語の豊かな使い手になるために 読む、書く、話す、聞く』太郎次郎社
- 田中茂範・吉田研作・加藤由美子（2005）：『英語教育の到達目標をとらえるためのEnglish Curriculum Frameworkー一貫した英語コミュニケーション能力と発達の観点ー』ARCLE 2005年度大学英語教育学会第44回大会
http://www.arcle.jp/research/edu_english/2005/
- シーラ・リクソン（編）（2013）：『チュートリアルで学ぶ新しい「小学校英語」の教え方』玉川大学出版部
- 三浦孝（2014）：『英語教育への人間形成的アプローチ 結び育てるコミュニケーションを教室に』研究社
- H. カーテン/C. A. B. ペソーラ（1999）：『児童外国語教育ハンドブック』大修館書店
- 中山兼芳（編）・伊藤克敏ら（2001）：『児童英語教育を学ぶ人のために』世界思想社
- 門田修平（編）（2003）：『英語のメンタルレキシコン』松柏社
- 松川禮子（2003）：『小学校英語活動を創る』高陵社書店
- 大城賢・直山木綿子（2008）：『小学校学習指導要領の解説と展開外国語活動編』教育出版
- 田崎清忠（編）（1995）：『現代英語教育総覧』大修館書店
- 木村松雄（編）（2011）：『新版英語科教育法 小中高の連携〜EGPからESPへ』学文社
- Mary Slattery & Jane Willis, 外山節子（訳）（2003）：『子ども英語指導ハンドブック English for Primary Teachers』オックスフォード大学出版局
- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一（2006）：『英語感覚が身につく実践的指導 コアとチャンクの活用法』大修館書店
- 中森蒼之（2013）：『外国語はどこに記憶されるのか 学びのための言語学応用論』開拓社
- 日本英語音声学会（2005）：『英語音声学辞典』成美堂
- バツイ・M・ライトバウ、ニーナ・スバダ、白井恭弘・岡田雅子（訳）（2014）：『言語はどのように学ばれるかー外国語学習・教育に生かす第二言語習得論』岩波書店
- 白畑知彦・若林茂則・村野井仁（2010）：『詳説 第二言語習得研究 理論から研究法まで』研究社
- 岡山ローバル英語研究会（2014）：『岡山から“ハロー”』山陽新聞社
- ラボ教育センター（編）（2011）：『佐藤学 内田信子 大津由紀夫が語ることばの学び、英語の学び』ラボ教育センター

資料 1

単元計画例 第1学年 低学年 ～体を使って英語を楽しむ～

		第1学年（全20時間）	
到達 目標	態度面	関・意・態	a 英語を聞いて全身で表現することを楽しんでいる。
		かかわり	b 友達となかよくかかわろうとしている。
		言語や文化	c 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しんでいる。
	技能面	聞くこと	d 身の回りのものについて、簡単な英語を聞くことに慣れ親しんでいる。
		話すこと	e 身の回りのものについて、簡単な英語を話すことに慣れ親しんでいる。
月・単元名・時間数 題材		学習内容及び時間数	単元における具体的な目指す姿
4月～5月 1 Helloはすてきな ことば④ あいさつ		・あいさつを知ろう① ・いろいろな国のあいさつを知ろう① ・友達とあいさつしよう① ・6年生とあいさつしよう①	a 英語を使ってあいさつをするを楽しんでいる。 b いろいろな人とあいさつをしようとしている。 c あいさつの言い方に慣れ親しんでいる。 d あいさつや簡単な指示について英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 e あいさつをするに慣れ親しんでいる。
6月～7月 2 学校をたんけんしよう ④ ※生活科 あいさつ 色		・いろいろな先生とあいさつしよう① ・色の言い方を知ろう① ・学校をたんけんしよう① ・学校マップをつくろう①	a 英語を使って簡単なやりとりを楽しんでいる。 b いろいろな人とあいさつをしようとしている。 c 色の言い方に慣れ親しんでいる。 d あいさつや簡単な指示について英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 e 簡単な指示について反応している。
9月～10月 3 図書室を飾ろう ④ ※図画工作科 色 形		・色の言い方に親しもう① ・形の言い方を知ろう① ・飾りを作ろう②	a 英語を使って簡単なやりとりを楽しんでいる。 b 友達となかよくかかわろうとしている。 c 形の言い方に慣れ親しんでいる。 d 簡単な指示について英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 e 簡単な指示について反応している。
11月～12月 4 みんなで動物園を作 ろう ④ ※図画工作科 色 形 動物		・絵本を読んでもらおう① 『Color Zoo』 ・色と形の言い方に親しもう① ・動物の言い方を知ろう① ・形を使って動物を作ろう①	a 英語を使って簡単なやりとりを楽しんでいる。 b 友達となかよくかかわろうとしている。 c 動物の言い方に慣れ親しんでいる。 d 簡単な指示について英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 e 簡単な指示について反応している。
1月～2月 5 動物あてクイズをし よう ③ 動物		・絵本を読んでもらおう① 『Open the Window』 ・動物の名前クイズをしよう① ・動物の鳴き声あてクイズをしよう①	a 英語を使って簡単なやりとりを楽しんでいる。 b 友達となかよくかかわろうとしている。 c 動物の言い方に慣れ親しんだり、国によって鳴き声の表し方に違いがあることを知ったりしている。 d 簡単な指示について英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 e 簡単な指示について反応している。
3月 6 6年生みたいになり たいな ①		・6年生の英語劇を鑑賞しよう①	d 英語の劇を聞くことに慣れ親しんでいる。

		第2学年（全20時間）	
到達目標	態度面	関・意・態	a 英語を聞いて全身で表現することを楽しんでいる。
		かかわり	b 友達となかよくかかわろうとしている。
		言語や文化	c 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しんでいる。
	技能面	聞くこと	d 身の回りのものについて、簡単な英語を聞くことに慣れ親しんでいる。
		話すこと	e 身の回りのものについて、簡単な英語を話すことに慣れ親しんでいる。
月・単元名・時間数 題材		学習内容及び時間数	単元における具体的な目指す姿
4月～5月 1 クイズ大会をしよう③ 色 形 動物		・先生の作ったクイズに挑戦しよう① ・3ヒントクイズを考えよう① ・友達とクイズ大会をしよう①	a 英語を使ってクイズをすることを楽しんでいる。 b 友達となかよくかかわろうとしている。 c 第1学年で習った言い方に慣れ親しんでいる。 d クイズを聞くことに慣れ親しんでいる。 e クイズを出したり答えたりすることに慣れ親しんでいる。
6月～7月 2七夕飾りを作ろう③ ※図画工作科 色 形 身の回りの道具		・色と形の言い方に親しもう① ・身の回りの道具の言い方を知ろう① ・七夕飾りを作ろう①	a 英語を使って簡単なやりとりを楽しんでいる。 b 友達となかよくかかわろうとしている。 c 身の回りの道具の言い方に慣れ親しんでいる。 d 簡単な指示について英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 e 簡単な指示について英語で反応している。
9月～10月 3おもちゃパークを作ろう⑤ ※生活科 色 形 身の回りの道具		・色と形の言い方に親しもう① ・身の回りの道具の言い方に慣れ親しもう① ・いろいろな国のおもちゃで遊ぼう① ・おもちゃを作ろう① ・1年生をおもちゃパークに招待しよう①	a 英語を使って簡単なやりとりを楽しんでいる。 b 1年生となかよくかかわろうとしている。 c 他の国のおもちゃに興味・関心をもっている。 d 簡単な指示について英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 e 簡単な指示について英語で反応している。
11月～12月 4給食の野菜はなあに③ ※食育 色 形 野菜		・絵本を読んでもらおう① 『How Are You Peeling?』 ・野菜の言い方を知ろう① ・給食の野菜をあてよう①	a 英語を使って簡単なやりとりを楽しんでいる。 b 友達となかよくかかわろうとしている。 c 野菜の言い方に慣れ親しんでいる。 d 簡単な指示について英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 e 簡単な指示について反応している。
1月～2月 5自分の好きなものを紹介しよう⑤ 野菜・果物		・学校の先生の好きなものをあてよう① ・野菜の言い方に親しもう① ・果物の言い方を知ろう① ・自分の好きなものを紹介しよう② (show and tell)	a 英語を使って簡単なやりとりを楽しんでいる。 b 友達となかよくかかわろうとしている。 c 果物の言い方に慣れ親しんだり、友達の好きなものについて知ったりしている。 d 友達の好きな野菜や果物について聞こうとしている。 e 自分の好きな野菜や果物について友達に伝えようとしている。
3月 66年生みたいになりたい①		・6年生の英語劇を鑑賞しよう①	d 英語の劇を聞くことに慣れ親しんでいる。

資料 3

単元計画例 第3学年 中学年 ～口を動かして英語を楽しむ～

		第3学年（全35時間）	
到達目標	態度面	関・意・態	a 英語を聞いたり話したりすることを楽しんでいる。
		かかわり	b 友達と協力してなかよくかかわろうとしている。
		言語や文化	c 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しみ、日本語との違いを知る。
	技能面	聞くこと	d 日常の身近なことについて、英語を聞くことに慣れ親しんでいる。
		話すこと	e 日常の身近なことについて、英語を話すことに慣れ親しんでいる。
月・単元名・時間数 題材		学習内容及び時間数	単元における具体的な目指す姿
4月～5月 1 食べ物クイズ大会をしよう③ 果物・野菜		・先生の作ったクイズに挑戦しよう① ・3ヒントクイズを考えよう① ・友達とクイズ大会をしよう①	a 英語を使ってクイズを出したり答えたりすることを楽しんでいる。 b 友達となかよくかかわろうとしている。 c 第2学年で習った言い方に慣れ親しんでいる。 d クイズを聞くことに慣れ親しんでいる。 e クイズを出したり答えたりすることに慣れ親しんでいる。
6月～7月 2 昆虫クイズを作ろう⑧ ※理科 10までの数 虫		・絵本を読んでもらおう① 『Ten Little Ladybugs』 ・クイズづくりの計画を立てよう① ・クイズづくりの準備をしよう⑤ ・作ったクイズを紹介しよう①	a 英語を使って show and tell を楽しんでいる。 b 友達と協力してなかよくかかわろうとしている。 c 10までの数や虫の言い方に慣れ親しんでいる。 d クイズを聞くことに慣れ親しんでいる。 e クイズを出したり答えたりすることに慣れ親しんでいる。
9月～10月 3 オリジナル紙芝居を作ろう⑧ ※図画工作 10までの数 虫 食べ物		・絵本を読んでもらおう① 『The Very Hungry Caterpillar』 ・紙芝居作りの計画を立てよう① ・紙芝居発表会の準備をしよう⑤ ・発表会をしよう①	a 英語を使って簡単なやりとりを楽しんでいる。 b 友達と協力してかかわろうとしている。 c 食べ物の言い方に慣れ親しんでいる。 d 簡単な文について英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 e 簡単な文について英語で反応している。
11月～12月 4 〇〇小スーパーマーケット開店⑦ ※社会科 10までの数 食べ物・飲み物		・デモンストレーションを見よう① ・スーパーマーケット開店までの計画を立てよう① ・準備をしよう④ ・買い物をしよう①	a 英語を使って簡単なやりとりを楽しんでいる。 b 友達と協力してかかわろうとしている。 c 飲み物の言い方に慣れ親しんでいる。 d 店員役やお客役として英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 e 店員役やお客役として英語で反応している。
1月～3月 5 わたたちの小学校を紹介しよう ⑧ 学校にあるもの		・デモンストレーションを見よう① ・学校紹介の計画を立てよう① ・学校紹介の準備をしよう⑤ ・発表会をしよう① (show and tell)	a 英語を使ってスピーチを楽しんでいる。 b 友達と協力してなかよくかかわろうとしている。 c 学校にあるものの言い方について知る。 d 友達の学校紹介を聞こうとしている。 e 自分たちで考えた学校紹介を友達に伝えようとしている。
3月 6 6年生みたいになりたいな ①		・6年生の英語劇を鑑賞しよう①	d 英語の劇を聞くことに慣れ親しんでいる。

		第4学年（全35時間）	
到達目標	態度面	関・意・態	a 英語を聞いたり話したりすることを楽しんでいる。
		かかわり	b 友達と協力してなかよくかかわろうとしている。
		言語や文化	c 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しみ、日本語との違いを知る。
	技能面	聞くこと	d 日常の身近なことについて、英語を聞くことに慣れ親しんでいる。
		話すこと	e 日常の身近なことについて、英語を話すことに慣れ親しんでいる。
月・単元名・時間数 題材		学習内容及び時間数	単元における具体的な目指す姿
4月～5月 1 オリジナルチャンツを作ろう ⑥ 学校にあるもの		・デモンストレーションを見よう① ・チャンツ作りの計画を立てよう① ・チャンツ作りの準備をしよう③ ・チャンツを録画しよう①	a リズムに乗ってチャンツをすることを楽しんでいる。 b 友達と協力してなかよくかかわろうとしている。 c 第3学年で習った言い方に慣れ親しんでいる。 d チャンツを聞くことに慣れ親しんでいる。 e チャンツをすることに慣れ親しんでいる。
6月～7月 2 給食放送はまかせて ⑥ ※食育 食べ物・飲み物		・デモンストレーションを見よう① ・給食放送作りの計画を立てよう① ・給食放送作りの準備をしよう③ ・給食放送を紹介しよう①	a 英語を使ってスピーチを楽しんでいる。 b 友達と協力してなかよくかかわろうとしている。 c 食べ物・飲み物の言い方に慣れ親しんでいる。 d 友達の給食放送について英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 e 給食について英語で紹介している。
9月～10月 3 Who am I? ～学校バージョン～ ⑦ 動作を表す言葉		・デモンストレーションを見よう① ・クイズづくりの計画を立てよう① ・クイズの準備をしよう④ ・クイズを紹介しよう①	a 英語を使って簡単なやりとりを楽しんでいる。 b 友達と協力してかかわろうとしている。 c 動作を表す言葉の言い方に慣れ親しんでいる。 d 英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 e クイズに英語で反応している。
11月～12月 4 Who am I? ～市町バージョン～ ⑦ 地域に関するもの		・デモンストレーションを見よう① ・クイズづくりの計画を立てよう① ・クイズの準備をしよう④ ・クイズを紹介しよう①	a 英語を使って簡単なやりとりを楽しんでいる。 b グループで協力してかかわろうとしている。 c 地域に関するものの言い方に慣れ親しんでいる。 d 英語を聞くことに慣れ親しんでいる。 e クイズに英語で反応している。
1月～3月 5 わたたちの市町をCMにしよう ⑧ 地域に関するもの		・デモンストレーションを見よう① ・CMづくりの計画を立てよう① ・CMづくりの準備をしよう⑤ ・CMを録画しよう① (show and tell)	a 英語を使って show and tell を楽しんでいる。 b グループで協力してなかよくかかわろうとしている。 c 市町にあるものの言い方について知り、地域の良さに気付いている。 d 友達が作った CM を聞くことに慣れ親しんでいる。 e 自分たちで考えた CM を工夫して伝えようとしている。
3月 6 6年生みたいになりたいな ①		・6年生の英語劇を鑑賞しよう①	d 英語の劇を聞くことに慣れ親しんでいる。

		第5学年（全35時間）	
到達目標	態度面	関・意・態	a 何とかわかり，間違いを恐れず，英語を使って伝えようとしている。
		かかわり	b 様々な人と積極的にかかわろうとしている。
		言語や文化	c 日本語と外国語の相違点に気付いている。 地域を主体に発信しようとしている。
	技能面	聞くこと	d 日常の身近な単語を聞き取っている。
		話すこと	e 一般的な定型の挨拶や，基礎的な語句や表現を使って自分の思いや考えを伝えている。
		読むこと	f ブロック体で書かれた大文字，小文字を読むことに慣れ親しんでいる。
		書くこと	g アルファベットの大文字・小文字や簡単な単語の綴りを書くことに慣れ親しんでいる。
月・単元名・時間数 題材		学習内容及び時間数	単元における具体的な目指す姿
4月～5月 1 Who am I? ～地域の 数字バージョン～ ⑥ 数字 地域に関するもの		・デモンストレーションを見よう① ・クイズづくりの計画を立てよう① ・クイズの準備をしよう③ ・クイズを紹介しよう①	a 何とかコミュニケーションを続けようとしている。 b 友達と協力してかかわろうとしている。 c 第4学年で習った言い方や数の言い方に慣れ親しんでいる。 d クイズに出てくる単語を理解している。 e クイズに英語で反応している。
6月～7月 2 アルファベットの大文字に親しもう ⑥ アルファベット大文字 身の回りの物		・アルファベットを探そう① ・アルファベットの文字と音声を一致させよう② ・アルファベット大文字辞典を作ろう③	a 英語を積極的に使おうとしている。 b 友達と協力してかかわろうとしている。 c 身の回りにアルファベットの大文字で表されているものに気付いている。 d アルファベットの文字と音声を一致させている。 e 欲しいものを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しんでいる。
9月～10月 3 アルファベットの小文字に親しもう ⑦ アルファベット大文字 アルファベット小文字		・アルファベットを探そう① ・アルファベットの文字と音声を一致させよう③ ・アルファベット小文字辞典を作ろう③	a 英語を積極的に使おうとしている。 b 友達と協力してかかわろうとしている。 c 身の回りにアルファベットの小文字で表されているものに気付いている。 d アルファベットの文字と音声を一致させている。 e 欲しいものを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しんでいる。
11月～12月 4 Who am I? ～都道府 県バージョン～ ⑦ ※社会科 日本に関するもの		・デモンストレーションを見よう① ・クイズづくりの計画を立てよう① ・クイズの準備をしよう④ ・クイズを紹介しよう①	a 英語を積極的に使おうとしている。 b グループで協力してかかわろうとしている。 c 日本に関するものの言い方を知る。 d 都道府県について興味をもち，クイズに出てくる単語を理解している。 e クイズに英語で反応している。 f クイズに出てくる単語を読むことに慣れ親しんでいる。 g クイズの絵カードに単語の綴りを写している。
1月～3月 5 わたしたちの広島を CMにしよう ⑧ ※社会科 広島に関するもの		・デモンストレーションを見よう① ・CMづくりの計画を立てよう① ・CMづくりの準備をしよう⑤ ・CMを録画しよう① (show and tell 等)	a 英語を積極的に使おうとしている。 b 様々な人とかかわろうとしている。 c 日本の文化や行事等の良さに気付いている。 d CMで扱う単語を理解している。 e 自分たちで考えたCMを工夫して伝えている。 f CMに出てくる単語を読むことに慣れ親しんでいる。 g CMで使う絵カードに単語の綴りを写している。
3月 6 6年生から学ぼう ①		・6年生の英語劇を鑑賞しよう①	d 英語の劇の内容を理解している。

		第6学年（全35時間）	
到達目標	態度面	関・意・態	a 何とかわかり，間違いを恐れず，英語を使って伝えようとしている。
		かかわり	b 様々な人と積極的にかかわろうとしている。
		言語や文化	c 日本語と外国語の相違点に気付いている。 地域を主体に発信しようとしている。
	技能面	聞くこと	d 日常の身近な単語を聞き取っている。
		話すこと	e 一般的な定型の挨拶や，基礎的な語句や表現を使って自分の思いや考えを伝えている。
		読むこと	f ブロック体で書かれた大文字，小文字を読むことに慣れ親しんでいる。
		書くこと	g アルファベットの大文字・小文字や簡単な単語の綴りを書くことに慣れ親しんでいる。
月・単元名・時間数 題材		学習内容及び時間数	単元における具体的な目指す姿
4月～5月 1 My Story Bookを作ろう ⑥ 動作を表す言葉		・『I Like Me!』のお話を聞こう① ・My Story Book づくりの計画を立てよう① ・My Story Book を作ろう③ ・My Story Book の発表会をしよう①	a My Story Book を意欲的に作ろうとしている。 b 友達の発表のよいところに気付いている。 c 絵本に出てくる表現を知る。 d 友達の発表を理解している。 e カードや実物等を使い工夫して表現している。
6月～7月 2 アルファベットカードを作ろう ⑤ アルファベット大文字 アルファベット小文字 身の回りの物		・アルファベットカード作りの計画を立てよう① ・アルファベットカード作りの準備をしよう③ ・5年生に紹介しよう①	a 英語を積極的に使おうとしている。 b 友達と協力してかかわろうとしている。 c 身の回りにアルファベットの大文字や小文字で表されているものに気付いている。 d アルファベットの文字と音声を一致させている。 e 欲しいものを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しんでいる。 f アルファベットカードに出てくる単語を読むことに慣れ親しんでいる。 g アルファベットカードに単語の綴りを写している。
9月～10月 3 Who am I? ～歴史クイズを作ろう～ ⑧ ※社会科 文化に関するもの		・デモンストレーションを見よう① ・クイズづくりの計画を立てよう① ・クイズの準備をしよう⑤ ・クイズを紹介しよう①	a 何とかコミュニケーションを続けようとしている。 b 友達と協力してかかわろうとしている。 c 日本や世界の歴史上の人物に興味をもち，クイズに用いる表現を知る。 d クイズに出てくる単語を理解している。 e クイズに英語で反応している。
11月～12月 4 My Dream ⑦ ※キャリア教育 職業		・デモンストレーションを見て，夢紹介の計画を立てよう① ・夢紹介の準備をしよう④ ・他の学校の小学生と夢を紹介し合おう① ・お礼のカードを作ろう①	a 英語を積極的に使おうとしている。 b 他の学校の小学生と進んでかかわろうとしている。 c 職業に関するものの言い方を知り，他の国や他の小学校の6年生の夢についても知る。 d 他の人の夢に出てくる単語を理解している。 e 自分の夢を工夫して英語で伝えている。 f 紹介カードに出てくる単語を読むことに慣れ親しんでいる。 g お礼のカードに単語の綴りを写している。
1月～3月 5 ○○市町の昔話を劇で紹介しよう ⑨ ※総合的な学習の時間 地域に関するもの		・デモンストレーションを見よう① ・劇づくりの計画を立てよう① ・劇づくりの準備をしよう⑥ ・劇を他学年に発表しよう①	a 英語を使って工夫して表現している。 b 他学年と積極的にかかわろうとしている。 c 市町の伝統文化や行事等の良さに気づき，他学年に紹介しようとしている。 d 劇に出てくる単語を理解している。 e 劇を様々な工夫をして伝えている。 f 劇の台本に出てくる単語を読むことに慣れ親しんでいる。 g 劇の台本に単語の綴りを写している。